

しも おお くち 下 大 口 遺 跡 第 2 次 調 査

— 宅地造成に伴う下大口遺跡第2次発掘調査報告書 —



2008

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市北区葛塚字下大口4668番地他に所在する下大口（しもおおくち）遺跡の発掘調査の報告書である。1次調査は平成19年4月27日に、2次調査は平成19年6月11日から6月25日に行った。
- 2 本調査は宅地造成事業に伴い、日生不動産株式会社から新潟市が受託したものである。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という。）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センターが（以下、市埋蔵文化財センターという。）が補助執行した。
- 3 平成19年度に発掘調査と整理作業及び報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章に記した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る記録類は、一括して市埋蔵文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の執筆（第VI章を除く）・編集は今井さやか（市埋蔵文化財センター文化財専門員）が行った。
- 6 第VI章自然科学分析については（株）火山灰考古学研究所に委託した。
- 7 本書で用いた写真は、遺跡写真は今井が撮影し、遺物写真は佐藤俊英氏（ビッグヘッド）に撮影を依頼した。ただし写真図版1は国土地理院の提供による。
- 8 各種図版作成・編集に関しては、（株）セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 9 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。

岡本郁栄、春日真実、金子拓男、関 雅之

（株）遠藤建設、（株）イビソク、日生不動産（株）、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団、新潟県教育庁文化行政課
（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図等を使用したものについては、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 本文中の注は各章の末尾に記した。引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した（ただし第VI章は章の末尾に記した）。
- 5 遺構番号は現場で付したものをを用いた。番号は遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。
- 6 土層観察の色調は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 1967）を用い、その記号を本書に掲載した。
- 7 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 8 土器実測図において、赤彩を濃い網目で表した。
- 9 遺物の注記は下大口遺跡の略記号「下大口」とし、出土年度・出土地点を続けて記した。
- 10 遺物番号は通し番号とし、本文および観察表・写真図版の番号は同一番号とした。
- 11 図版中の「P」は土器、「S」は石を表す。

目 次

第Ⅰ章 序 章

第1節 発掘調査に至る経緯	1
---------------	---

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
-----------------	---

第2節 周辺の遺跡	2
-----------	---

第3節 歴史的環境	5
-----------	---

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘調査	6
----------	---

第2節 発掘調査	6
----------	---

A 調査方法	6
--------	---

B 調査経過	8
--------	---

C 調査体制	8
--------	---

第3節 整理作業	9
----------	---

A 整理方法	9
--------	---

B 整理経過	9
--------	---

第Ⅳ章 遺 跡

第1節 概 要	9
---------	---

第2節 層 序	9
---------	---

第3節 遺 構	9
---------	---

A 遺 構	9
-------	---

第Ⅴ章 遺 物

第1節 古墳時代の遺物	11
-------------	----

A 土器の分類と記述	11
------------	----

B 出土土器等各説	13
-----------	----

C 石 製 品	14
---------	----

第Ⅵ章 自然科学分析

第1節 下大口遺跡の土層とテフラ	15
------------------	----

A はじめに	15
--------	----

B 土層の層序	15
---------	----

C テフラ検出分析	15
-----------	----

D 屈折率測定	16
---------	----

E 考 察	16
-------	----

第2節 プラントオパール分析	36
----------------	----

A はじめに	17
--------	----

B 分析試料と分析方法	17
-------------	----

C 分析結果	17
--------	----

D 考 察	18
-------	----

第3節 種実同定	19
A はじめに	19
B 分析試料と分析方法	19
C 分析結果	19
D 考察	19

第Ⅶ章 総括

第1節 下大口遺跡出土の土器について	22
A 出土土器の編年的位置づけ	22
B 器種構成比率	22
第2節 遺跡の性格	23
引用・参考文献	24
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第1図 下大口遺跡周辺地形分類図(1/150,000)	3	第8図 下大口遺跡1C21グリッドにおける植物珪酸体 分析結果	18
第2図 周辺の遺跡分布図(1/50,000)	4	第9図 下大口遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)	21
第3図 遺跡試掘坑位置図(1/1,000)	7	第10図 下大口遺跡の炭化種実	21
第4図 試掘調査土層柱状図(1/20)	7	第11図 遺跡別器種構成図	22
第5図 下大口遺跡土器分類図(1/6)	12		
第6図 1C1グリッドの土層柱状図	16		
第7図 2C2グリッドの土層柱状図	16		

表目次

第1表 テフラ検出分析結果	16	第3表 下大口遺跡における植物珪酸体分析結果	18
第2表 屈折率測定結果	16	第4表 下大口遺跡SX4の器種構成比率	22

別表目次

別表1 下大口遺跡主要遺構計測表	24	別表2 下大口遺跡古墳時代土器観察表	25
------------------	----	--------------------	----

図版目次

図版1 周辺の旧地形図(1/25,000)	図版6 SX4出土遺物ドット図 小グリッド別出土土器重量 分布図(1/40)
図版2 下大口遺跡と周辺遺跡(1/10,000)	図版7 出土遺物1 SK6・SX2・SX4
図版3 グリッド設定図(1/2,500・1/1,000)	図版8 出土遺物2 SX4・SD1・包含層・サブトレンチ
図版4 遺構全体図(1/80)	図版9 出土遺物3 包含層・サブトレンチ・確認調査・石製品
図版5 遺構実測図(1/40)	

写真図版目次

写真図版1 下大口遺跡周辺空中写真	写真図版4 出土遺物 SX2・SX4・サブトレンチ
写真図版2 完掘状況、下大口遺跡出土土器	写真図版5 出土遺物 SK6・SX2・SX4・SD1
写真図版3 調査前現況、表土掘削、基本層序1、基本層序2、 SK6完掘、SX2完掘、SX4土層断面、SX4完掘	写真図版6 出土遺物 SX2・SX4・SD1・サブトレンチ・ 包含層

第 I 章 序 章

第 1 節 発掘調査に至る経緯

新潟市北区は、新潟市の郊外型ベッドタウンとして、近年、土地区画整理や宅地造成等の開発が盛んに行われている。

平成 19 年 2 月に北区葛塚地内で計画された日生不動産株式会社による宅地造成について、新潟市歴史文化課は豊栄支所（当時）建設課長を通じ、未周知の遺跡が存在する可能性があるため、事前に試掘が必要との判断を示した。

平成 19 年 4 月 18 日、日生不動産株式会社より新潟市教育長（以下、市教育長とする。）あてに埋蔵文化財の事前調査の依頼があり、平成 19 年 4 月 27 日に試掘調査（1 次調査）を行った。調査の結果、古墳時代前期の遺物が確認されたため、平成 19 年 5 月 7 日付新歴第 5003 号の 5 で、新潟県教育長（以下、県教育長とする。）あてに終了報告を提出するとともに、新たに発見された遺跡を、小字名から「下大口（しもおおくち）遺跡」とし、同日付新歴第 5003 号の 9 で新遺跡発見届を提出し、周知化の手続きがとられた。

平成 19 年 5 月 9 日、日生不動産株式会社と新潟市において協議を行い、遺跡推定範囲内で新たに道路を造成する部分約 160m²について本調査を実施すること、調査経費は日生不動産株式会社が負担すること、遺跡に該当する宅地の買主に遺跡の保護を重要事項として説明することで合意した。

平成 19 年 5 月 11 日、日生不動産株式会社より市教育長あてに文化財保護法第 93 条の届出があり、その取扱いについては、平成 19 年 5 月 23 日付新歴第 5003 号の 11 で、遺跡範囲内における道路部分約 160m²について開発前に本発掘調査を実施するよう指示した。併せて、遺物の出土が希薄であった道路部分については工事立会を行い、宅地部分については 30cm の保護層を盛土によって確保する旨が通知された。

平成 19 年 6 月 11 日に日生不動産株式会社と新潟市で契約書を取り交わし、新潟市教育委員会は同日、新歴第 5003 号の 16 で、県教育長あてに文化財保護法 99 条の規定に基づく発掘調査の報告を提出し、本発掘調査に着手した（2 次調査）。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

新潟市は信濃川と阿賀野川の運ぶ土砂により形成された越後平野にあり、西に角田山塊、南に新津丘陵を控えている。遺跡の所在する新潟市北区は、阿賀野川右岸に位置し、地形は北東から南西にかけて海岸線に平行して走る数列の砂丘と、自然堤防などの微高地、砂丘間の後背湿地、福島潟などの潟湖から成っている。

砂丘列は内陸側から新砂丘Ⅰ・新砂丘Ⅱ・新砂丘Ⅲと3群に大別され、さらに内陸側からそれぞれ新砂丘Ⅰ-Ⅰ～4、Ⅱ-Ⅰ～4、Ⅲ-Ⅰ～2と枝番が付けられている〔田中ほか1996〕。信濃川と阿賀野川をはじめとする河川の土砂により形成された砂丘であるが、一方で河川の流れを阻み、内部湛水を引き起こした。これにより、福島潟や紫雲寺潟等の大小の潟湖が形成された。また、砂丘によって海への出口を失った新井郷川や駒林川などの河川は、大きく蛇行し氾濫のたびにその流路を変えていた。これらの河川の自然堤防の姿は旧地形図や空中写真に見ることができる〔図版1・写真図版1〕。

さて、今回調査を行った下大口遺跡は、新潟市北区葛塚字下大口4668番地他に所在し、福島潟を水源とする旧大口川¹の自然堤防上に位置している〔第1図〕。現在の遺跡周辺は、近世以降、幾度となく行われた排水工事と戦後の土地改良による乾田化、土地区画整理による埋立盛土により地形の起伏はほとんど認められない〔関1988、長谷川1998〕。

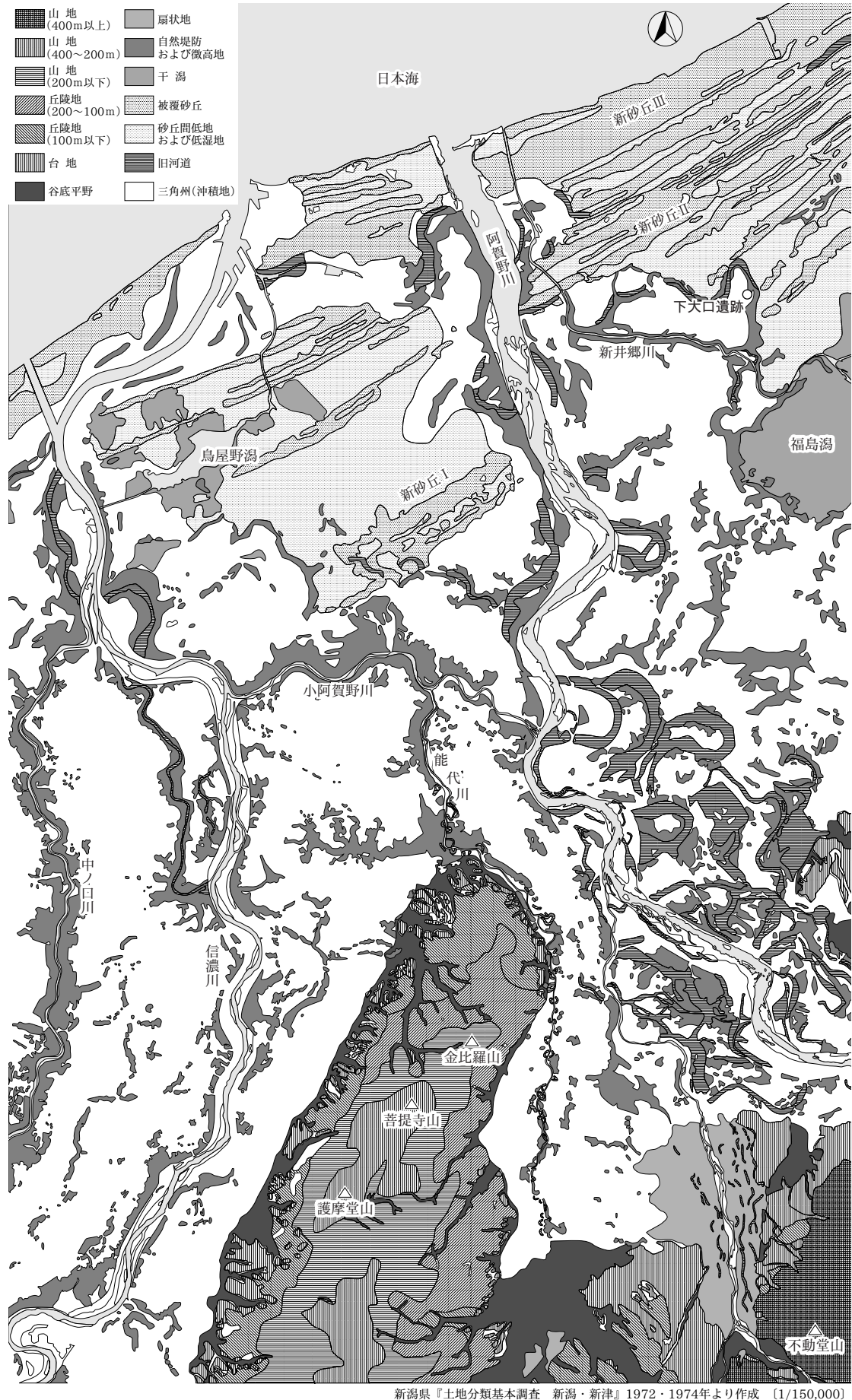
第2節 周辺の遺跡

下大口遺跡周辺の遺跡の立地は、砂丘上の遺跡と自然堤防上の遺跡の大きく2つに分かれる。時代別に見ると、縄文・弥生時代の遺跡は砂丘上のみ分布し、古墳時代以降ようやく自然堤防上にも遺跡の分布が見られるようになる〔第2図・図版2〕。

縄文時代の遺跡は新砂丘Ⅰ-2・3・4上に分布が見られる。北区最古の縄文時代前期後半の土器を出土した上黒山遺跡は新砂丘Ⅰ-2上に立地する。また、同じく新砂丘Ⅰ-2上に、縄文時代中期前半の法花鳥屋遺跡^{ほっけとや}があるが、前期・中期の遺跡は規模・数ともに少ない。晩期の遺跡には新砂丘Ⅰ-4上に位置する鳥屋遺跡^{とや}がある。鳥屋遺跡では、昭和37年、53年、54年にそれぞれ本発掘調査が行われており、墓坑と考えられる遺構が190基見つかった。これらの遺構からは、土器・石器のほかに耳飾や垂れ飾といった装身具、土偶や石冠といった呪術具が出土した〔関1988〕。

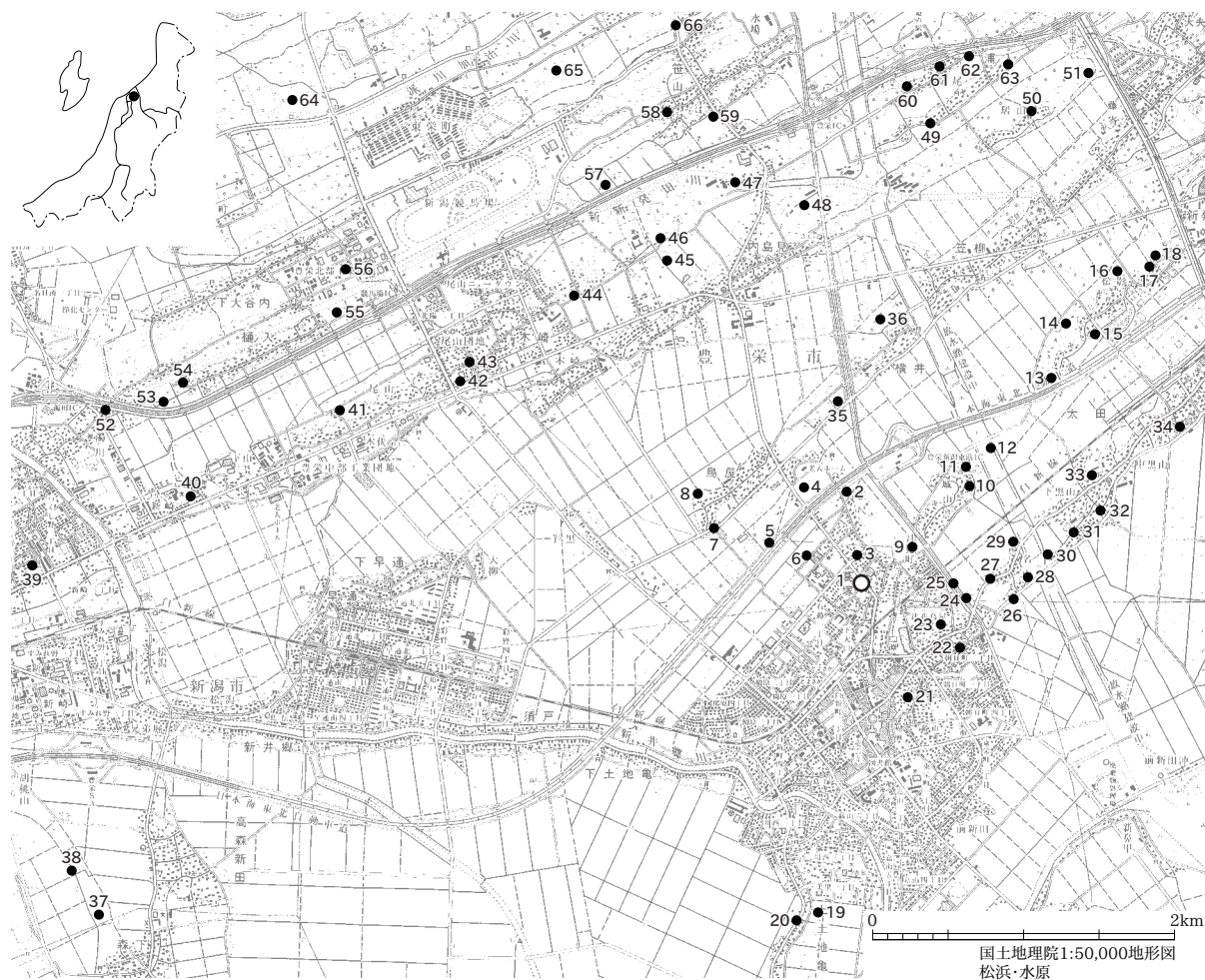
弥生時代の遺跡も同じく新砂丘Ⅰ-2・3上に分布が見られる。県道付け替え工事に先立って行われた法花鳥屋B遺跡^{むくろじ}範囲確認調査では、弥生時代後期末の壺がほぼ完形で出土した〔関ほか2005〕。また、同じ砂丘上の椋C遺跡は、葛塚中学校のグラウンド建設に伴う試掘調査により発見された遺跡である。その後市道工事に伴う本調査で、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての遺物が多く出土し、中でも北方系の続縄文土器がまとまって出土したことが注目される〔新潟市2007〕。

古墳時代になると、ようやく自然堤防を中心とする微高地への居住が始まる。下大口遺跡の周辺では、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い正尺A・C遺跡^{しょうじやく}の本発掘調査が行われた。その結果、周囲を溝で区画した古墳時代前期の住居跡が検出されたほか、出土品も装飾器台をはじめとした祭祀色の強い遺物が多く出土している〔尾崎2001、土橋ほか2006〕。また、葛塚遺跡では市営住宅解体に伴って行われた発掘調査で、線刻人物画のある赤彩の土師器壺が出土した〔関1999〕。正尺・葛塚ともに旧大口川の自然堤防上に位置し、この付近一帯は古墳時代前期の遺跡の密集地帯であることがわかる。また、砂丘上においても引き続き集落が営まれており、新砂丘Ⅰ上で



第1図 下大口遺跡周辺地形分類図

第2節 周辺の遺跡



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	下大口遺跡	古墳	23	法花鳥屋B遺跡	縄文・奈良・平安	45	内島見B遺跡	平安
2	正尺A遺跡	古墳・平安・江戸	24	法花鳥屋C遺跡	奈良・平安	46	あかしやだん遺跡	平安
3	正尺B遺跡	古墳	25	法花鳥屋D遺跡	奈良・平安	47	引越遺跡	弥生
4	正尺D遺跡	古墳	26	棕C遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	48	内島見遺跡	縄文
5	正尺C遺跡	古墳	27	サンマイ塚	不明	49	浦ノ入B遺跡	縄文
6	上大川遺跡	古墳	28	名山B遺跡	縄文	50	居山B遺跡	縄文
7	鳥屋遺跡	縄文	29	名山A遺跡	奈良・平安	51	居山A遺跡	縄文
8	寸苗庵経塚	江戸	30	名山C遺跡	奈良・平安	52	法華塚	江戸
9	甲山遺跡	平安	31	棕B遺跡	奈良・平安	53	寺ノ山遺跡	室町
10	城山館跡	室町	32	棕遺跡	不明	54	種ノ入C遺跡	縄文
11	太田城山遺跡	縄文	33	下黒山遺跡	不明	55	種ノ入B遺跡	縄文
12	新五兵衛山遺跡	平安	34	中黒山遺跡	中世	56	種ノ入A遺跡	縄文
13	松影A遺跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世	35	横井遺跡	平安	57	笹山C遺跡	縄文
14	松影D遺跡	縄文・古墳	36	内島見C遺跡	室町	58	笹山B遺跡	縄文
15	松影E遺跡	不明	37	森下古銭出土地	室町	59	笹山D遺跡	平安
16	松影C遺跡	古墳	38	下前川原遺跡	平安・室町	60	切尾C遺跡	縄文
17	松影B遺跡	古墳	39	新崎遺跡	奈良・平安	61	切尾B遺跡	縄文
18	大池遺跡	古墳	40	築上山遺跡	平安	62	切尾A遺跡	縄文
19	上土地亀遺跡	平安	41	尾山C遺跡	平安	63	浦ノ入A遺跡	縄文
20	上土地亀B遺跡	奈良・平安	42	尾山B遺跡	縄文・平安	64	向山遺跡	平安
21	葛塚遺跡	古墳	43	尾山A遺跡	平安	65	上舟橋遺跡	平安
22	法花鳥屋遺跡	縄文	44	たやしき遺跡	弥生	66	笹山A遺跡	縄文

第2図 周辺の遺跡分布図

は、縄文から中世の複合遺跡である松影A遺跡や上黒山遺跡がある。特に松影A遺跡では、日本海沿岸東北自動車道建設に伴う本発掘調査が行われ、量は少ないものの、縄文時代中期・後期・晩期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期・中期・後期、古代、中世の幅広い時代の遺物が出土した〔加藤ほか2001〕。

奈良・平安時代は市内でも遺跡数が最も多い時代である。特に平安時代9世紀中頃からは、遺跡数が爆発的に増加し、その立地も沖積地の微高地が多いのが特徴である。自然堤防上に位置する奈良・平安時代の遺跡には、駒林川の自然堤防上に立地する上土地亀遺跡がある。上土地亀遺跡では、炉状遺構が検出され、9世紀頃の遺物も出土している〔関1993〕。砂丘上に立地する奈良・平安時代の遺跡には、新砂丘I-3列上の新五兵衛山遺跡と甲山遺跡があげられる。新五兵衛山遺跡は、福島潟放水路掘削に伴い発掘調査が行われた平安時代の遺跡である。井戸、炉状遺構が検出されており、鉄滓1,199点・炉壁片684点・羽口が多く出土した。このことから二次製鉄を行った集落と想定されている〔関ほか1989・1996〕。甲山遺跡は下大口遺跡の東約400mのところにある平安時代を主体とする複合遺跡である。土地区画整理に伴い発掘調査が行われ、井戸が1基検出されている〔関ほか2005〕。

中世以降12～15世紀の集落遺跡では、阿賀野川右岸の自然堤防上に立地する^{しもまえかわら}下前川原遺跡がある。平成14年に行われた発掘調査では、丸木舟を転用した井戸枠のほか、青磁・白磁をはじめとする貿易陶磁が多数出土したことから内水面交通の拠点集落が想定されている〔遠藤2004〕。

第3節 歴史的環境

下大口遺跡を含む阿賀野川以北の地域、いわゆる「阿賀北」が文献上に表れるのは、7世紀の中頃である。大化3（647）年の淳足柵、翌4（648）年の磐舟柵の畿内政権による設置である。現在のところ、この両城柵の発見はなく、正確な位置は不明となっている。しかし、かつてはこの阿賀北地域が、畿内系の軍勢力を背景に進出を図る開拓集団と、蝦夷など北方系の人々との相接する地域であったと考えられている。さらに阿賀北地域は、沼垂郡と磐船郡とに分かれているが、遺跡のある葛塚地域は沼垂郡に所属している。『和名抄』によれば、沼垂郡には足羽・沼垂・賀地の3郷がおかれていたという。具体的な現地比定は難しく、断定できないが、沼垂郷は現在の信濃川河口右岸から松浜にかけての砂丘を含む北東側にあたる地域、賀地郷は福島潟右岸で加治川中流域の新発田市を中心とする地域と考えられている。また、足羽郷は中世の奥山荘（胎内市域）と白河荘（阿賀野市域）の二説があるが、地名からは判断できない。

中世におけるこの地域は、新井郷川以北から新発田が領域とされる豊田荘と、阿賀野川を西の境とし、岡方・長浦地区を含んだ阿賀野市を領域とする白河荘に大きく分けられるが、遺跡のある地域は豊田荘に属すると考えられる。豊田荘は長承4（1135）年に成立した東大寺領の荘園である。この荘園は、東大寺領の頸城郡石井荘と古志郡土井荘が廃絶したため、その代わりに立て替えて成立し、越後における唯一の東大寺領荘園として存続した。

慶長3（1598）年の上杉家会津転封により、遺跡周辺は新発田藩領となった。新発田藩は収入増加のため、紫雲寺潟や福島潟を干拓し新田開発を目論んだ。享保15（1730）年には、幕府の監督の下、阿賀野川を松ヶ崎で掘り割り、日本海に直接流す分水路の工事を行った。この工事には、新潟湊の水位の低下を心配する新潟町の猛反対があったため、増水分だけを流す堀とすること、堀割が破壊されたらすぐに復旧すること、湊として使用しないことなどを条件に実施された。しかし、翌年の春の雪解け水による大洪水で、この分水路は本流となった。この結果、阿賀野川の水位は4尺（約1.2メートル）も下がり、福島潟周辺にも広大な干上り地ができたという。以後、阿賀野川右岸の開発は急速に進展することとなり、葛塚をはじめ多くの村が成立した〔長谷川1998、松井2001〕。

¹：この旧河川については、旧新井郷川とする説もあるが、豊栄博物館館長宮崎芳春氏のご教示により地元で呼称されていた旧大口川とした。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘調査

試掘調査（1次調査）を平成19年4月27日に行った。開発予定面積は4,116m²である。調査に当たり、10箇所の試掘坑を設定した。試掘調査はバックホウで表土から徐々に掘削した後、人力により精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を記録した。試掘調査面積は48m²である。この結果1・4・5・8Tの各試掘坑で古墳時代の遺物が確認され、うち1・4Tでは包含層が良好な状態で確認された。このため新遺跡発見の手続きがとられ、下大口遺跡として周知化された。

以上の結果をふまえて開発者と協議を行い、道路部分約160m²について記録保存のための本調査を実施することとなった。また、それ以外の道路部分については、近世における攪乱が著しいため、工事立会とし、宅地部分2,114m²については、盛土にて保護層を確保することとした。

第2節 発掘調査

A 調査方法

1) 現況

現況は標高2.0mの宅地である。旧大口川の自然堤防上に立地し、昭和40年代に区画整理が行われ、水田を埋め立てたという。

2) グリッドの設定（図版3）

グリッドを設定するにあたっては、グリッドの基点をX座標213940.000Y座標63060.000（平面直角座標系第8系）、緯度37°55′32″8568、経度139°13′02″2900を1A杭とした。基点に対し10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は北西隅の杭を基点として短軸（南北）をアラビア数字、長軸（東西）をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドをさらに2m方眼に区分して1から25の小グリッドに分割し、「1C22」のように呼称した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

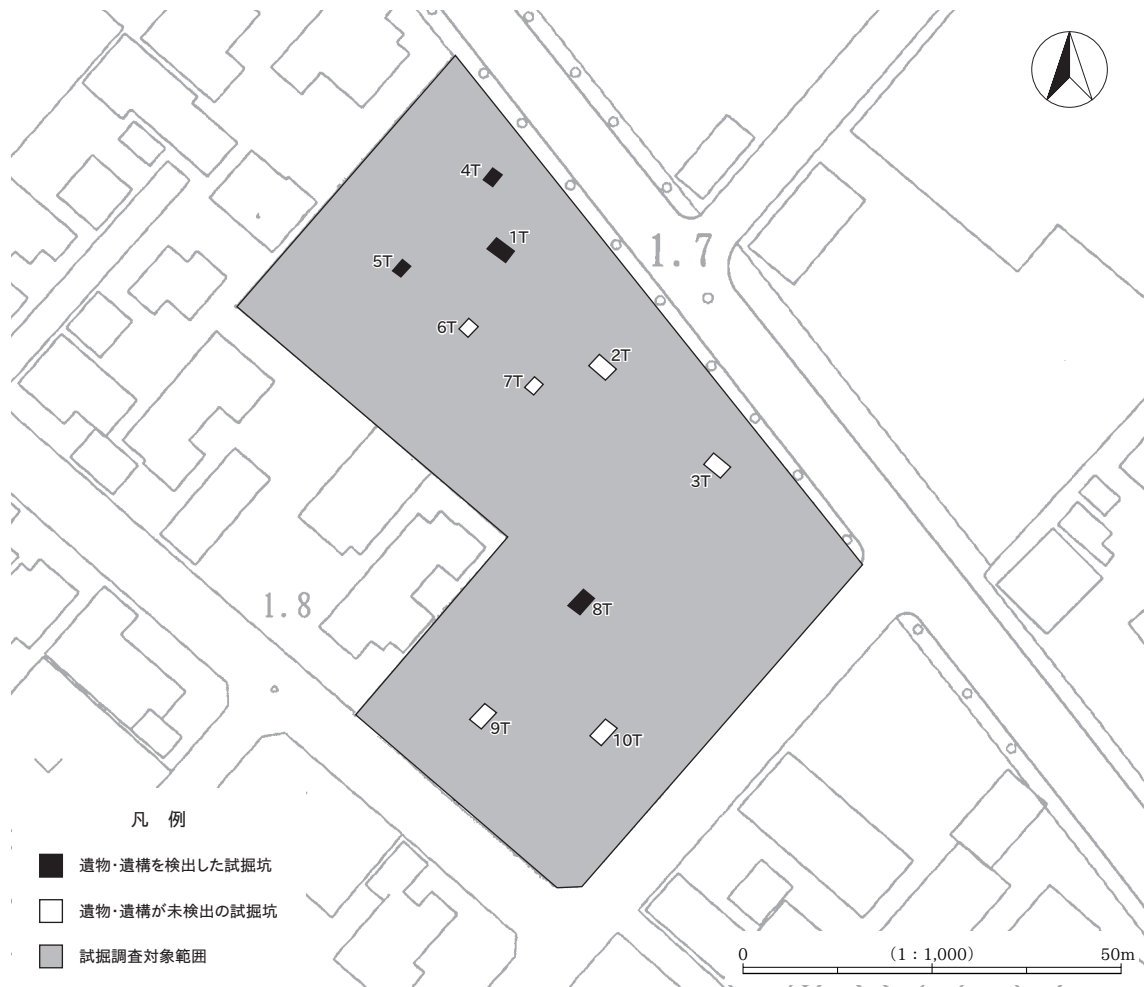
発掘調査区の2点の座標は次の通りである。2C（X座標213930.000、Y座標63080.000）、3C（X座標213920.000、Y座標63080.000、）3C杭で座標北は真北に対し26分27秒東偏し、磁北は真北に対し7度50分西偏する。

3) 調査方法

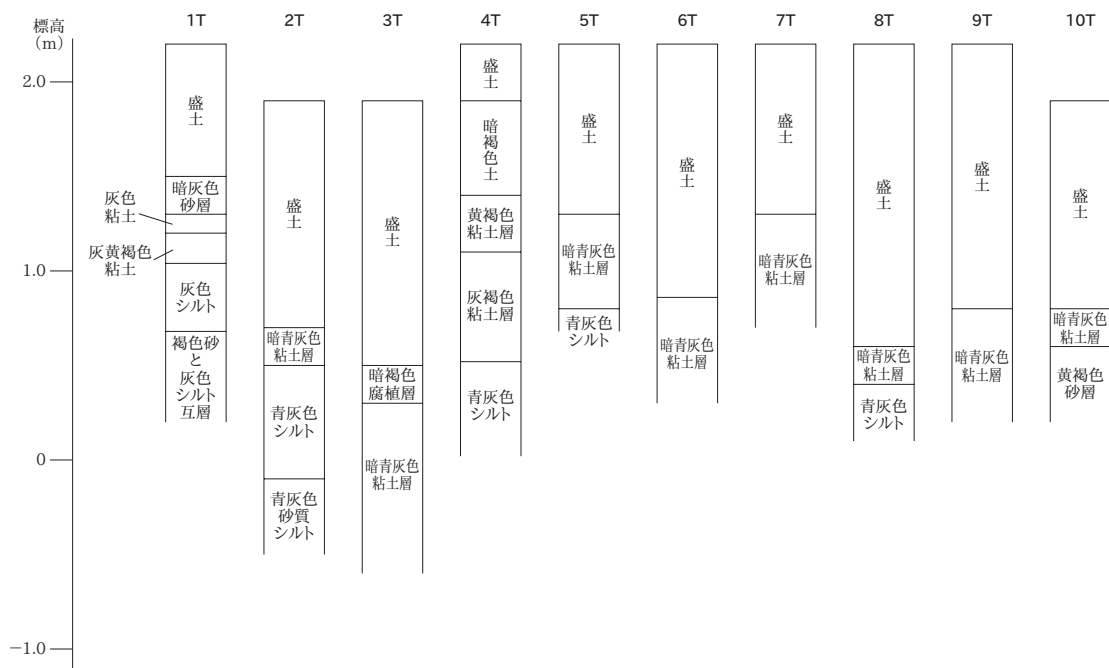
①表土剥ぎ 確認調査によって遺物の出土が少量であると予想されたことから、遺物包含層（V層）上面まで、遺物の出土に注意しながら重機（バックホウ）により除去した。法面は安全面を考慮して一分の勾配とした。また、湛水防止のために表土剥ぎと平行して調査区の周囲に土側溝を掘り、2吋のポンプで強制排水を行った。土側溝は人力で掘削した。幅20cm、深さ20cm程度の溝で、壁面を垂直に掘ると崩壊する恐れがあるために緩く傾斜をつけたV字の溝である。土側溝による遺構の破壊が考えられたが、湛水により調査が不能になることを防ぐ処置である。

②包含層掘削・遺構検出・発掘 重機で掘削後、人力で精査を行い、包含層の掘削・遺構の検出にあたった。排土は人力で調査区外へ搬出した。

③実測・写真 平面図や断面図、各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、併



第3図 試掘坑配置図 (1/1000)



第4図 下大口遺跡試掘調査土層柱状図

第3節 整理作業

せて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版と6×7版のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④遺物取り上げ 包含層出土遺物は小グリッド単位として取り上げた。遺構出土遺物は遺構単位・小グリッド単位・層ごとに一括で取り上げた。遺存率の良いものについては、測量業者に委託してドットで取り上げた(図版6)。

⑤自然科学分析 火山灰と考えられる土層があったため、火山灰分析を行った。併せて古環境復元のために、植物珪酸体分析・種子同定を行った。

B 調査経過

平成19年6月9日から諸準備を開始し、6月11日・12日の両日は、重機により表土掘削を行った。この時点で、調査区南西側の近世攪乱が予想より広がっていたことと、湧水による壁面の崩落が激しかったことから、調査対象面積を減少させることとした。表土掘削と並行して作業員6名で土側溝掘削、法面仕上げを行った。6月12日から測量業者による杭打ちが行われ、同日より遺構検出・掘削作業を開始した。6月23日に完掘し、高所作業車による俯瞰写真撮影を行った。6月25日に下層の確認調査を行い、機材撤収を含め全ての調査が終了した。最終的な発掘調査面積は上端119.059m²、下端88.336m²である。

C 調査体制

【平成19年度】

調査主体	新潟市教育委員会(教育長 佐藤満夫)
所管課	新潟市歴史文化課(課長 倉地一則 埋蔵文化財係長 渡邊朋和)
事務局	新潟市埋蔵文化財センター(所長 山田光行)
調査担当	新潟市埋蔵文化財センター文化財専門員 今井さやか
整理補助員	五十嵐智子 佐々木陽子 佐藤則子 芝野尚子 高木裕貴子 沼沢綾子(短期臨時職員)

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ(内径54.5×33.6×10.0cm)にして12箱である。古墳時代の土器が中心であるが、自然礫などの自然遺物も若干見られる。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①水洗。②注記。③グリッド別、種別の重量計測。④遺構出土遺物の器種毎の重量・個体数計測。⑤接合。⑥報告書掲載遺物の抽出。⑦実測図、観察表作成。⑧トレース図作成。⑨版下作成。実測図は整理補助員が原寸で作成し、トレース図と版下作成は、業者に委託しデジタルトレースで行った。

2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した1/40の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の1/80、1/40の遺構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。その他の図面は整理補助員が作成した。

B 整理経過

発掘調査作業中に、出土遺物の水洗・注記を行った。調査終了後、出土遺物の計測・接合・実測と写真・図面整理を行い、併せて測量業者に委託した遺構平面図の校正作業を行った。遺構平・断面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。この間職員は原稿執筆、遺物写真の撮影、図版のレイアウト・報告書の編集にあたった。

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

下大口遺跡は旧大口川左岸の自然堤防上に立地する。標高は2.0mを測る。

検出した遺構は、土坑1基、性格不明遺構2基、溝1条が確認されている。出土遺物から遺構の大部分が古墳時代に属すると考えられるが、近世の遺構も若干みられる。

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして12箱である。ほとんどが古墳時代（4世紀）の土師器であり、近世の遺物も若干認められる。また、自然礫が存在する。

第2節 層 序

基本層序を図版4に示す。下記のとおり、大きく6層に分けられる。I～II層は近代の盛土層であるIII層～IV層は近世の遺物包含層及び遺構確認面である。V層中からは古墳時代の遺物のみが出土する。遺構検出面はVI層上面である。遺構確認面の標高は概ね1.0mである。

- I 層 黄褐色砂層（2.5Y5/4）現代の盛土層
- II 層 黄灰色砂層（7.5YR4/2）近代・現代の盛土層
- III 層 灰色砂質土（5Y5/1）炭化物・近代の陶磁器片を含む層
- IV 層 灰黄色砂質土層（10YR5/2）近世の遺構確認面
- V 層 にぶい黄橙色粘土層（10YR7/2）古墳時代の遺物包含層
- VI 層 灰白色粘土層（10YR7/1）古墳時代の遺構確認面。下層にいくにつれ砂質が強くなる

第3節 遺 構

遺構番号は、遺構の種類に係らず検出順に付した。説明は、土坑、性格不明遺構、溝、ピットの順に記す。

詳しい遺構の計測値等は別表1に示した。遺構の形態分類は、おおまかに平面形は円形・楕円形・不整形の3種類に、断面形は皿形・半円形・箱形の3種類に分類した。

遺構の所属時期はIV層上面の遺構が近世、VI層上面の遺構が古墳時代である。

A 遺 構

遺構は、土坑1基、性格不明遺構2基、溝1条、ピット3基が確認されている。以下概要を述べる。

1) 土坑 (SK) ・性格不明遺構 (SX)

SK6（図版4・5、写真図版3）

1C21に位置する。VI層上面から掘り込まれる古墳時代の土坑である。規模は長軸1.20m、短軸1.00m、深さ0.20mである。平面形は楕円形、断面形は箱形で、覆土は2層に分かれる。特に2層は炭化物から成る黒色粘土層で、覆土中からは土師器甕（1・2）、土師器鉢（3）が出土している（図版7）。

SX2（図版4・5、写真図版3）

2B9・13・14・18・19・23・24、3B2・3・4・7・8に位置する。Ⅲ層から掘り込まれる近世の遺構である。古墳時代の確認面においては、幅2.5mの溝状を呈しているが、上面での平面形は調査区外に延びており不明、断面形は箱形で掘り込み面から底面までは0.6mである。主軸方位(N-7°-E)が旧地形の細長い形状の水田と同一方向であることから、水田跡の可能性もある。覆土は2層に分かれる。覆土中から土師器甕・壺・高杯・器台、近世陶磁器が出土している(図版7)。

SX4 (図版4・5、写真図版3)

1C16・17・21・22・23、2C1・2・3・6・7・8に位置する。Ⅵ層上面から掘り込まれる。平面形・断面形は調査区外に延びているため全体像が不明であるが、近隣の正尺C遺跡では幅が2～3mの周溝に囲まれた掘立柱建物が確認されていることから、この遺構も住居に伴う周溝の可能性もある。覆土は4層に分かれる。特に炭化物が多く混じる2層褐灰色粘土層・3層灰色粘土層中からの遺物出土が多く、土師器甕・壺・蓋・鉢・高杯・器台が出土している(図版7・8)。

特に赤彩の小型壺(24)や蓋(30)が出土していることから祭祀色の強い遺構であると言える。一方、土師器甕(14)の口縁にはモミ痕が残るほか、3層の土壌中からはイネのプラントオパールが、種実同定においても炭化米が検出されていることから、この遺跡の稲作を裏付ける資料と考えられる。

また、4層からは火山ガラスが検出されているが、一次堆積層ではなく供給源は不明であった(第Ⅵ章第1節参照)。

2) 溝 (SD)

SD1 (図版4・5)

2B5・10、2C1・2・3・6・7・8に位置する。東西方向(N-89°-E)に走行する近世の溝である。Ⅳ層上面から掘り込まれる。断面は皿形で浅く、覆土は3層に分かれる。上層は木屑などの腐植層となっており、ゆるやかな流れであったと推察される。覆土中から土師器甕・壺・鉢・高杯・器台、近世陶磁器が出土している(図版8・9)。

3) ピ ッ ト

Pit5 (図版4・5)

2C1に位置する。Ⅵ層上面から掘り込まれる古墳時代のピットである。平面形は円形で、断面は半円形である。覆土は3層に分かれる。1層の灰白色シルト層は火山灰の可能性が考えられたが火山ガラスは検出されなかった(第Ⅵ章第1節参照)。覆土中から土師器甕・鉢が出土しているが、小片のため図示していない。

第V章 遺物

第1節 古墳時代の遺物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして12箱、総破片数3,676点、総重量32,439.85gである。ほとんどが古墳時代前期（4世紀）の土師器であり須恵器の出土はない。近世（18世紀）の遺物も若干認められる。また、石製品が存在する。遺物の出土位置・種別・器種・分類・法量・胎土・色調・焼成・調整・遺存率については、別表2に記した。

A 土器の分類と記述

1) 用語の説明

記述は最初に土器分類を行い、次に遺構別・包含層等の順に記した。遺構の順序は「第IV章第3節遺構」の記述順序に準じる。

分類は手法による分類とし、アルファベットで（A・B…）と表した。しかし、全体の器形を残すものは少なく、一部分の形態により分類したものが多くある。

成形・調整の表現・名称は、〔春日1994〕の記載を参考に以下のとおりとした。

1. ハケメー櫛状の工具を使い、土器の表面を調整するもので、器面には平行する条線が残される。
2. ミガキ器面を磨いているもので、工具痕が明瞭に残るものと残らないものがある。
3. ナデー不定方向のナデ。
4. ヨコナデー回転を用いるナデ。指や皮を使う。
5. 板ナデー板の木口面を用いるナデ

2) 分類（第5図）

次に本遺跡の遺物器種分類を行う。主な器種は、大きく分けて甕・壺・鉢・高杯・器台であり、これらについてさらに分類した。分類については、正尺C遺跡〔土橋ほか2006〕を参考にした。

甕 いずれも口縁が「く」の字状に屈曲する。基本的な調整は、内外面をハケメ調整後、口縁部がヨコナデーで整えられている。底部は丸底のものや平底のもの、台が付くものがあるが、完形品が少ないため分類できない。口縁部形態によってさらに以下のように細分される。

A類 口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が摘み上げられるもの。正尺C遺跡のC1類に相当。

B類 口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が面取りされるもの。正尺C遺跡のC2類に相当。

C類 口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が面取りされないもの。正尺C遺跡のC4類に相当。

壺 基本的な調整は、内外面をハケメ調整後、外面をミガキ調整で仕上げる。底部は丸底のものや平底のものがあるが、完形品が少ないため分類できない。口縁部形態によってさらに以下のように細分される。

A類 頸部が直立する二重口縁壺。赤彩されるものもある。正尺C遺跡のA類に相当。

B類 外反する二重口縁壺。

C類 口縁が外反して立ち上がる広口壺。正尺C遺跡のG類に相当。

D類 細口で有段口縁を呈するもの。

E類 東海系のひさご壺またはそれを模した小型壺。赤彩される。正尺C遺跡のN類に相当。

蓋 円柱状でつまみを持たないものが1点だけ出土した。

鉢

A類 有段口縁のもの。

B類 体部と口縁部の境に段を持つ。口縁部は大きく発達する。北陸地方の在来系の器種である。

高杯 調整は、ハケメの後ミガキをかけるものと、かけないものとに大別される。脚部のほとんどが「八」の字状に開く。以下、受部の形態によって細分する。

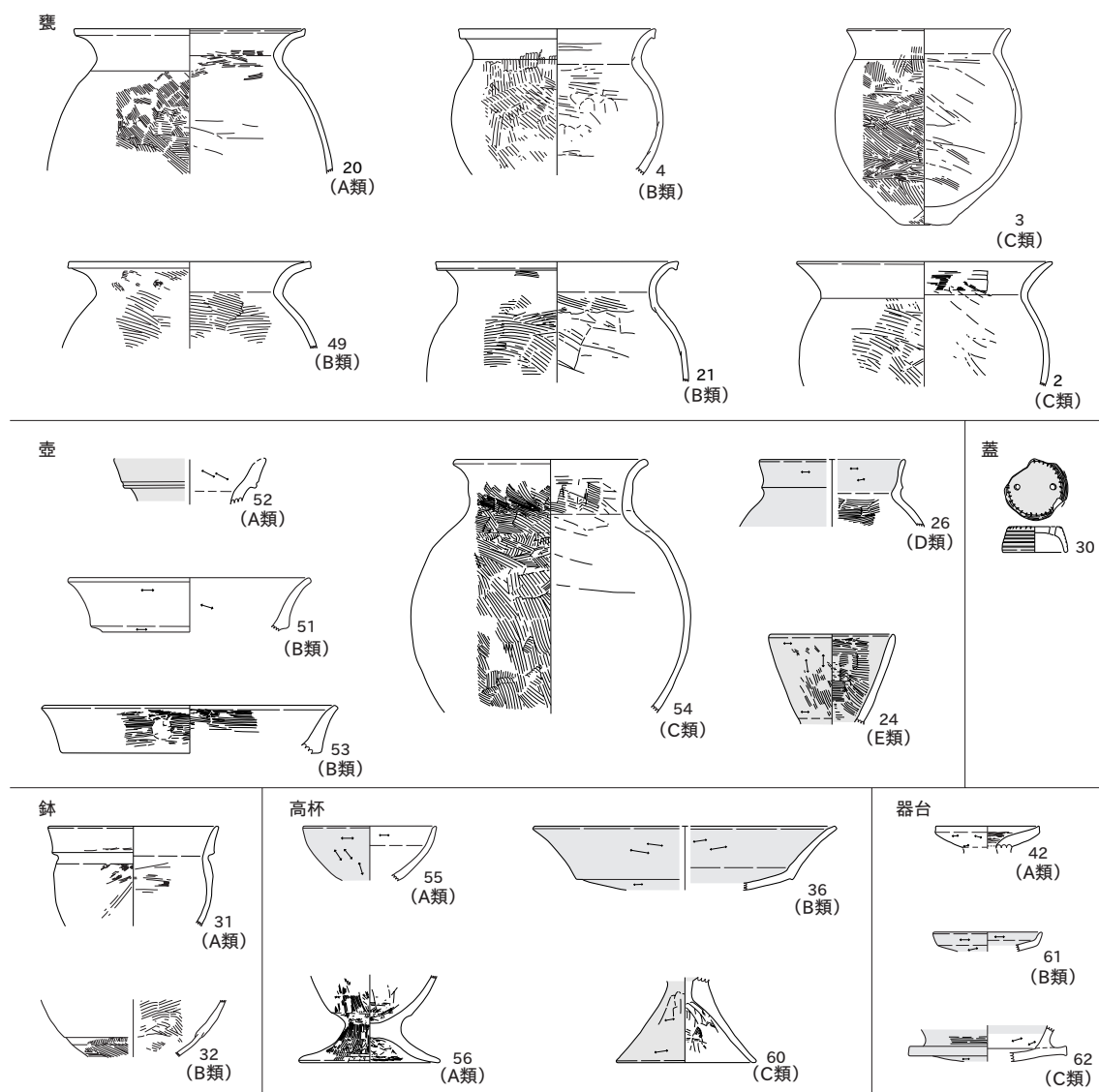
A類 受部が内湾するもの。正尺C遺跡のD類に相当。

B類 受部が外反し、有段口縁となるもの。正尺C遺跡のA類に相当。

C類 受部が直線的に立ち上がるもの。正尺C遺跡のC類に相当。

器台 調整は、ハケメの後ミガキをかける。脚部のほとんどが「八」の字状に開く。以下、受部の形態によって細分する。

A類 北陸系小型器台。正尺C遺跡のA類に相当



第5図 下大谷遺跡土師器分類図 (S = 1/6)

B類 受部の口縁端部を摘み上げるもの。正尺C遺跡のD類に相当

C類 受部が鐙状にめぐる、鐙付装飾器台。正尺C遺跡の結合器台A類に相当。

B 出土土器等各説

1) 遺構出土遺物

SK6 (図版7、写真図版5)

土師器甕(1・2)が出土している。1・2は甕C類で、内外面ハケメ調整がされる。1の内面には輪積み痕が残る。2の口縁内部には板ナデ痕が残る。

SX2 (図版7、写真図版4～6)

近世遺構であるが、古墳時代の土器も多く出土した。以下に紹介する。

土師器甕(3～5)・壺(6)・鉢(7)・高杯(8)・器台(9)が出土している。3は小型の甕C類である。内外面ハケメ調整がなされ、口縁部はヨコナデされている。内面には輪積み痕が残り、外面にはススが付着する。4は甕B類である。内外面やや幅の広いハケメ調整がされる。5は体部が球形の小型の甕である。体部下半と底部のみが残存する。内外面ハケメ調整がされるが、摩滅が著しい。6は壺の底部である。外面はハケメ後にミガキ調整がされ、内面はハケメ調整のみである。7は鉢A類である。外面はハケメをナデ消ししている。内面はナデ調整である。8は高杯A類である。内外面ハケメ調整がなされ、口縁部外面がヨコナデされる。9は器台A類である。内外面がミガキ調整される。

SX4 (図版7・8、写真図版4～6)

土師器甕(10～23)・壺(24～29)・蓋(30)・鉢(31・32)・高杯(33～41)・器台(42)が出土している。10は甕C類である。胎土は粗く、外面は細かいハケメで調整されている。内面には輪積み痕が残る。口縁の「く」の字屈曲部がやや緩やかである。11は小型の甕C類である。内外面がハケメ調整される。12は甕C類である。外面はハケメ調整がされ、口縁部はヨコナデされている。外面にはススが付着する。13は甕C類である。外面はハケメ調整がされ、口縁部はヨコナデである。口縁の「く」の字屈曲部内面は口縁部がやや張り出している。14は甕C類である。内外面ハケメ調整がされ、内面はさらにナデ消しされる。口縁部はヨコナデされる。体部内面には輪積み痕が明瞭に残る。口縁部が体部と比較して、やや厚手である。また、口縁部にはモミの圧痕が残っている。15は甕C類である。内外面ハケメ調整が薄く残る。外面にはススが付着する。16は甕C類である。内外面ともハケメ調整がされ、口縁部はヨコナデされる。体部内面には輪積み痕が明瞭に残る。17はやや大型の甕C類である。胎土は粗く焼成も不良で、調整は外面にハケメとヨコナデがわずかに残るのみである。18は甕の底部である。外面のハケメをナデ消ししている。内面はハケメのみである。やや内湾していることから壺の底部の可能性もある。19は甕の底部である。外面はハケメ調整されている。20は口縁端部を上方につまみ上げる甕A類である。内外面ハケメ調整され、内面は板ナデによりナデ消しされる。口縁部はヨコナデである。21は口縁端部が面取りされる甕B類である。内外面ハケメ調整され、内面は板ナデによりナデ消しされる。口縁部はヨコナデである。22は甕B類の口縁部である。内外面ハケメ調整され、口縁部はヨコナデされる。23は甕B類である。内面は板ナデによりナデ消しされる。口縁部はヨコナデである。内面には輪積み痕が残る。24は壺E類の口縁部である。内外面ともハケメ調整後ミガキが入る。また、内外面ともに赤彩されている。口縁端部が摘み上げられているのも特徴である。25は壺C類である。内外面ミガキ調整される。26は壺D類である。器壁が薄く口縁部に段が付く形状である。内外面ともにミガキ調整がされる。体部内面はハケメ調整である。鉢の可能性もある。27は壺C類の頸部である。外面は縦位のハケメ後にミガキが入り、内面は横位のハケメである。焼成は良好で硬質である。28・29は同一個体と考えられる有段口縁の壺B類である。内外面がハケメ調整であり、外面はさらにミガキが入る。口縁部はヨコナデされる。30は蓋である。外面は赤彩され、焼成前穿孔が2箇所、口縁に平行した沈線が6条巡る。市内の緒立C遺跡に類例がある〔渡邊ほか1994〕。31は鉢

A類である。内外面ハケメ調整がされ、口縁部はヨコナデされる。体部外面にはススが付着する。32は鉢B類である。体部のみの出土であることから、全体像が不明であるが、体部と口縁の境目に内外面ともに段を持つ形状から、台付鉢と考えられる。近隣では、北蒲原郡聖籠町の山三賀Ⅱ遺跡での出土例がある〔坂井ほか1989〕。33は高杯A類である。受部が内外面ともにミガキ調整がされる。34は高杯B類である。内外面ともに赤彩のちミガキ調整されている。35は高杯A類である。内外面ともに赤彩のちミガキ調整されている。体部より口縁部の方が、厚みがある。36は有段の高杯A類である。内外面ともに赤彩後にミガキ調整されている。口縁部は外反する。37・38は高杯A類である。内外面ともに赤彩後にミガキ調整されている。口縁部は外反する。39は高杯脚部である。透かし孔が3ヶ所あり外面は赤彩後にミガキ調整されている。内面は頸部に絞り痕が残るほか裾部にはハケメが残る。40は高杯である。受部は内外面ミガキ調整がされ、脚部は外面のみにミガキ調整がされる。脚部の内面はハケメ調整される。41は高杯である。受部は内面が赤彩後にミガキ調整される。受部外面は残存しないため不明である。脚部は外面が赤彩後にミガキ調整され、内面はハケメ調整である。脚部には4ヶ所の透かし孔がある。また、脚部上部には剥離痕があり、脚部を作り上げた後に受部を継ぎ足したと考えられる。42は器台A類である。径は小さく身も浅いことから北陸系と考えられる。

SD1 (図版8、写真図版5)

土師器壺D類(43)が出土している。口縁に段のつく壺である。器壁はやや厚い。口縁部はヨコナデされ、体部内面にはハケメが残る。

b) 遺構外出土遺物 (図版8・9、写真図版4・6)

サブトレンチ及び包含層、確認調査出土遺物を一括して紹介する。サブトレンチ出土品については、サブトレンチがSX4内に設定されているため、SX4に伴うものの可能性が高い。

土師器甕(44～50・64)、壺(51～54)、高杯(55～59)、器台(60～63)が出土している。44は甕C類である。口縁外面にはハケメがわずかに残る。45は甕C類である。内外面ハケメ調整され、口縁部はヨコナデされる。46は台付甕の底部である。高台部は貼り付け高台となっている。47～50は口縁端部が面取りされる甕B類である。内外面はハケメ調整され、口縁部はヨコナデされる。51は二重口縁となる壺B類である。口縁部は内外面ともにミガキ調整される。52は二重口縁の壺A類である。頸部は直立し、内外面ミガキ調整される。外面は赤彩が施され、沈線が1条巡る。53は二重口縁の壺B類である。口縁部には円形の剥離痕が残り、装飾がついていたとみられる。54は広口壺の壺C類である。内外面ハケメ調整で、口縁部はヨコナデされる。55は受部が内湾する高杯A類である。受部は内外面ともにミガキ調整され、外面は赤彩が施される。56は高杯A類である。受部、脚部とも内外面がハケメ調整される。脚部のやや低い高杯である。57は高杯A類である。受部は内外面ミガキ調整され、脚部は内外面ハケメ調整である。58は受部が直線的に立ち上がる高杯C類である。受部は内外面ミガキ調整され、口径はほかの高杯に比べて大きいのが特徴である。東海系の高杯を模したものと考えられる。59は高杯脚部である。透かし孔が4ヶ所あり、内外面ミガキ調整される。60は器台脚部である。受部内面と脚部外面が赤彩後にミガキ調整されている。脚部内面はハケメ調整である。61は口縁端部を上方につまみあげる器台B類である。受部の内外面が赤彩後にミガキ調整されている。62は鏝付の器台C類である。内外面ミガキ調整がされ、外面と内面の上部に赤彩を施される。装飾鏝のついた器台は近隣の正尺C遺跡でまとまって出土している。63は器台の脚部である。脚部外面は赤彩後にミガキ調整が施されている。内面は板ナデされる。64は甕C類である。体部内面にハケメがわずかに残る。口縁部はヨコナデされる。

C 石製品

SD1 (図版9、写真図版6)

軽石(65)が出土している。軽石の円礫で、擦り痕がわずかに残る。

第VI章 自然科学分析

(株) 火山灰考古学研究所

第1節 下大口遺跡の土層とテフラ

A はじめに

新潟市下大口遺跡における発掘調査では、凝灰質の土層や植物遺体や微化石を含む可能性が高い土層が検出された。そこで、遺跡の年代や古環境などに関する資料を得るために、現地で土層を記載するとともに試料採取を行い、室内でテフラ（いわゆる火山灰）、プラント・オパール（植物珪酸体）、種子に関する分析を実施することになった。調査分析の対象地点は、1C21グリッドSX4、2C1グリッドPit5、そして2C2グリッドSX4の3地点である。

B 土層の層序

1) 1C21グリッド SX4

1C21グリッドでは、下位より灰色砂層（層厚3cm以上、VI層）、炭化物混じり暗灰色泥層（層厚8cm、SX4 3層）、砂混じり暗灰色粘質泥層（層厚9cm、SX4 2層）が認められる（第6図）。これらのうち、SX4 3層の炭化物混じり暗灰色泥層からは、古墳時代前期の土器が検出されている。

2) 2C1グリッド Pit5

2C1グリッドでは、白色凝灰質シルト（試料1）がパッチ状に認められた。

3) 2C2グリッド SX4

2C2グリッドでは、下位より砂混じり灰色粘質泥層（層厚7cm以上 SX4 4層）、白色凝灰質シルト層（層厚0.8cm）、炭化物や砂を含む灰色粘質泥層（層厚7cm、SX4 3層）が認められる（第7図）。これらの土層からは、古墳時代前期の土器が検出されている。

C テフラ検出分析

1) 分析試料と分析方法

新潟平野とその周辺には、妙高、焼山、沼沢、浅間、榛名、御岳など比較的近傍の火山のほか、中国地方や九州地方など遠方に分布する火山に由来するテフラ（火山^{はいせつぶつ}砕屑物、いわゆる火山灰）が降灰している。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、凝灰質の土層が認められた下大口遺跡でも、2C1グリッドの試料1と2C2グリッドから採取された3試料のうちの2点の合計3試料を対象に、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- (1) 適量の試料について超音波洗浄を行い泥分を除去。
- (2) 80℃で恒温乾燥。
- (3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。2C1グリッドの試料1からは、軽石やスコリアさらに火山ガラスなどテフラに特徴的な粒子は検出されなかった。2C2グリッドの2試料では軽石やスコリアは検出されなかったものの、軽石型やバブル型の火山ガラスが比較的多く認められた。試料2と試料3にそれぞれ含まれている火山ガラスの

色調は、無色透明、淡褐色、白色と、無色透明および淡褐色である。

D 屈折率測定

1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象試料のうち、2C2グリッドの試料2について、火山ガラスの屈折率 (n) の測定を実施した。屈折率の測定には、温度変化型屈折率測定装置 (京都フィッショントラック社製RIMS2000) を使用した。

2) 測定結果

屈折率測定の結果を第2表に示す。火山ガラス (32粒子) の屈折率 (n) は1.498 - 1.502である。

E 考察

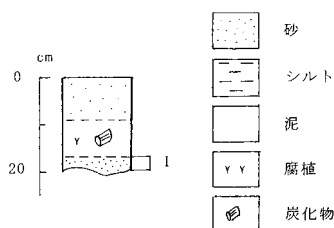
分析で火山ガラスが検出された2C2グリッドでは、白色を呈する試料2とその下位の試料3で含まれる火山ガラスの量はさほど違わなかった。また、白色を呈する2C1グリッドの試料1から、テフラ粒子は検出されなかった。したがって、本遺跡で今回注目された白色の色調は、テフラ層を示唆するものではないと思われる。

テフラのようにも見える2C2グリッドの試料2に含まれる火山ガラスについては、その屈折率から福島市域以北の東北地方に広く分布し、新潟平野域での検出の期待の大きい十和田aテフラ (To-a) [大池1972、町田ほか1981、町田・新井1992・2003など] の可能性が考えられるが、有色の火山ガラスや角閃石が比較的多いこと、また一般的に遠方に降灰しているTo-a起源の火山ガラスの屈折率が水和のためより高くなっていることなどから、少なくともTo-a起源のテフラ粒子の純度が高いとは言いにくい。

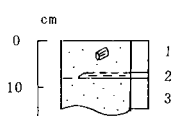
一方、角閃石の存在や火山ガラスの屈折率の一部の値から、試料中に榛名火山から6世紀初頭に噴出した榛名ニッ岳渋川テフラ (Hr-FA) [新井1979、坂口1986、早田1989、町田・新井1992・2003] あるいは6世紀中葉に噴出した榛名ニッ岳伊香保テフラ (Hr-FP) [新井1962、坂口1986、早田1989、町田・新井1992、2003] が含まれていることも考えられるが、やはりその純度は高くなく、少なくともこの試料が採取された土層についてはいずれかの一次堆積層ではないと言えよう。

従来の旧新津市域における分析結果などを合わせると、現段階ではやはり分析試料に含まれる火山ガラスや角閃石については、約5,000年前¹に沼沢火山から噴出した沼沢テフラ (Nm-N) [只見川第四紀研究グループ1966a 1966b] やそれに関係した火山泥流、さらに約5~5.5万年前以前に沼沢火山から噴出した沼沢金山テフラ (Nm-Kn) [鈴木・早田1994、町田・新井2003] などに由来する可能性が高いように思われる。

なお、個々の火山ガラスの起源については、屈折率測定に合わせて、信頼度の高いエレクトロン・プローブX線マイクロアナライザー (EPMA) による主成分化学組成分析を実施することが有効となろう²。



第6図 1C1グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



第7図 2C2グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第1表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
2C1グリッド	1	-	-	-	-	-	-
2C2グリッド	2	-	-	-	++	pm>bw	cl,pb
	3	-	-	-	++	pm>bw	cl,pb,wh

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。
bw: バブル型, pm: 軽石型, cl: 無色, pb: 淡褐色, wh: 白色。

第2表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラスの屈折率 (n)	測定粒子数
2C2グリッド	2	1.498-1.502	32

測定は温度変化型屈折率測定装置 (RIMS2000) による。

第2節 プラント・オパール分析

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている [杉山2000]。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である [藤原・杉山1984]。

B 分析試料と分析方法

分析試料は、1C21グリッドSX4 3層から採取された1点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 [藤原1976] を用いて次の手順で行った。

- (1) 試料を 105°C で24時間乾燥 (絶乾)
- (2) 試料約1g に対し直径約 $40\ \mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g 添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- (3) 電気炉灰化法 (550°C ・6時間) による脱有機物処理
- (4) 超音波水中照射 (300W ・ 42kHz ・10分間) による分散
- (5) 沈底法による $20\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- (6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である [杉山2000]。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

C 分析結果

1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第3表および第8図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す (第9図)。

[イネ科]

イネ、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、Aタイプ (くさび型)

[イネ科-タケ亜科]

チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

2) 植物珪酸体の検出状況

試料1では、イネ、チマキザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ミヤコザサ節型なども少量検出された。また、海綿動物に由来する海綿骨針〔宇津川ほか1979〕も認められた。イネの植物珪酸体密度は3,500個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。おもな分類群の推定生産量によると、イネが優勢となっている。

D 考 察

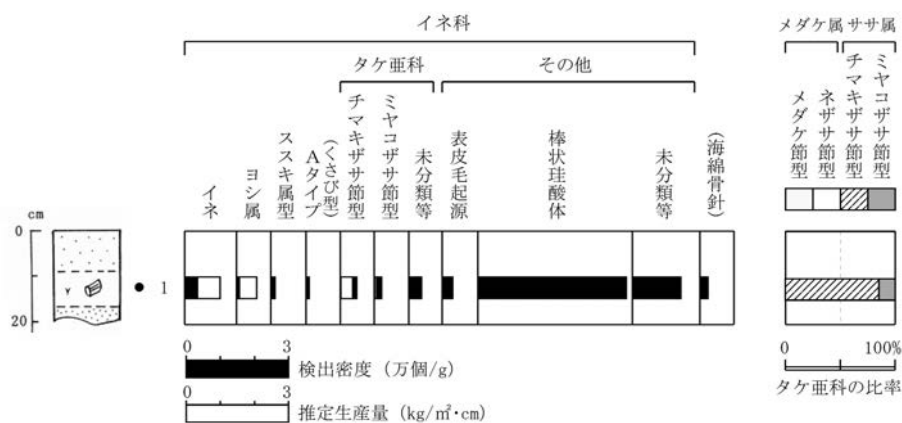
SX4 3層では、イネが比較的多量に検出され、試料採取地点周辺で稲作が行われていた可能性が高いと判断される。また同層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属、ササ属（おもにチマキザサ節）などが分布していたと推定される。

表3 下大口遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		地点・試料	1C-21
分類群	学名		1
イネ科	Gramineae		
イネ	<i>Oryza sativa</i>		35
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		7
Aタイプ(くさび型)	A type		7
タケ亜科	Bambusoideae		
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		48
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassino</i>		21
未分類等	Others		35
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin		28
棒状珪酸体	Rod-shaped		430
未分類等	Others		139
(海綿骨針)	Sponge		21
植物珪酸体総数	Total		748

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)		
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.81
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.44
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.36
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassino</i>	0.06

タケ亜科の比率 (%)		
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	85
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassino</i>	15



第8図 下大口遺跡1C21グリッドにおける植物珪酸体分析結果

第3節 種実同定

A はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

B 分析試料と分析方法

試料は、1C21グリッドのSX4 3層である。

以下の手順で、種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料200cm³に水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

C 分析結果

分析の結果、イネ（炭化米）2粒子およびカヤツリグサ科1粒子が検出された。以下に形態的特徴を記す。

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実（完形・破片） イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

サイズ（長さmm×幅mm）：3.94mm×1.76mmおよび4.06mm×2.06mm。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 炭化果実

炭化しているため黒色で倒卵形を呈し、断面は円形である。

サイズ（長さmm×幅mm）：1.90mm×1.52mm。

D 考察

種実同定の結果、SX4 3層からはイネ（炭化米）2粒子およびカヤツリグサ科1粒子が検出された。イネ（炭化米）の形態は、佐藤〔1988〕の基準によると極小から極々小で短粒からやや長粒に偏しており、成長不良のものが焼かれた可能性も考えられる。カヤツリグサ科は周辺に生育していた雑草類とみなされる。

参考文献

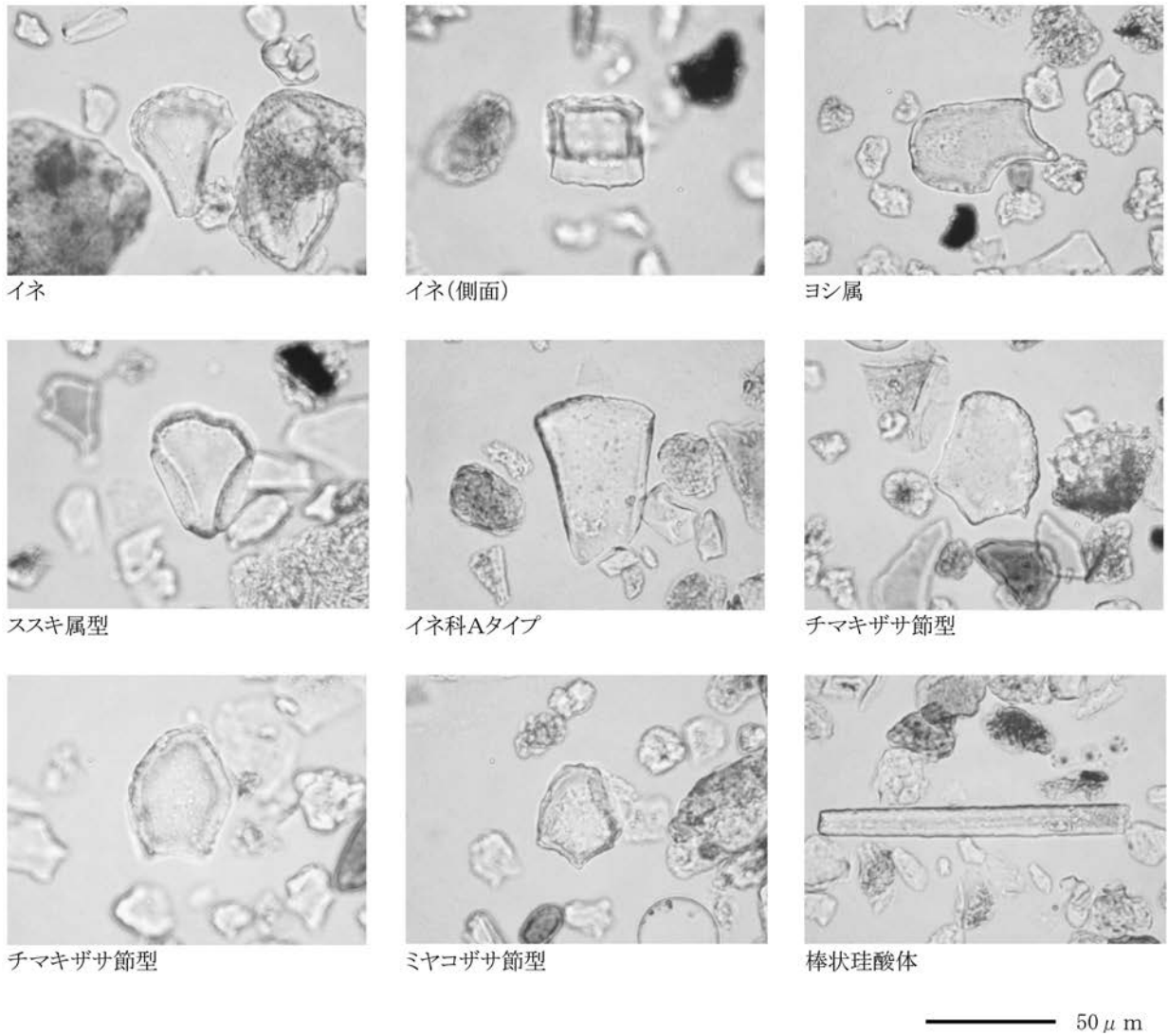
- 新井房夫 1962 『関東盆地北西部地域の第四紀編年』群馬大学紀要自然科学編、10、p.1-79
- 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.157、p.41-52
- 荒牧重雄 1968 「浅間火山の地質」『地団研専報』no.14、45p
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会、276p
- 町田 洋・新井房夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会、336p
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51、p.562-569
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11、p.232-233
- 坂口 一 1986 「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』、p.103-119群馬県教育委員会
- 早田 勉 1989 「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27、p.297-312
- 鈴木毅彦・早田 勉 1994 「奥会津沼沢火山から約5万年前に噴出した沼沢-金山テフラ」『第四紀研究』33、p.233-242

第3節 種 実 同 定

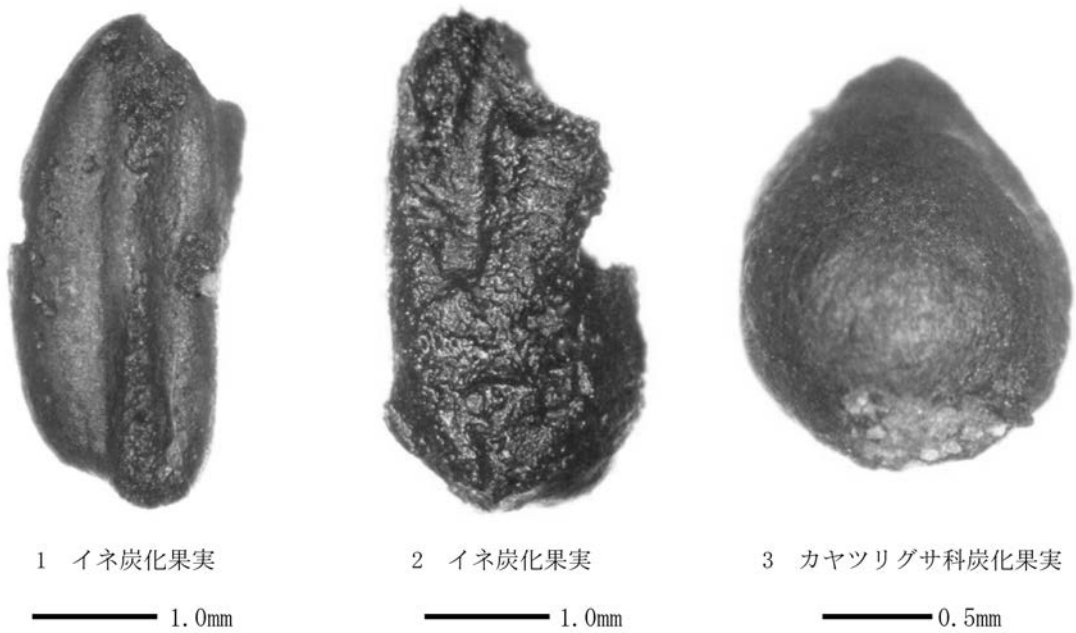
- 只見川第四紀研究グループ 1966a 「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代XXVI」『地球科学』82、p.8—9
- 只見川第四紀研究グループ 1966b 「只見川・阿賀野川流域の第四紀の編年—とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について」『第四紀』8、p.76—79
- ト部厚志・高浜信行 2000 「正尺A・正尺C遺跡から産出した火山灰層の鉱物組成と火山ガラスの化学組成」『正尺A・正尺C遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団、p.9—12.
- 宇津川徹・細野衛・杉原重夫 1979 「テフラ中の動物珪酸体“Opal Sponge Spicules”について」『ペドロジスト』23(2)、p.134—144
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社、p.189—213
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9、p.15—29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17、p.73—85
- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂、494p.
- 佐藤敏也 1988 「弥生のイネ」『弥生文化の研究』雄山閣出版、p.97—111
- 南木睦彦 1993 『葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法』東京大学出版会、p.276—283.

¹ : 放射性炭素(¹⁴C)年代.Nm—Nの年代については、暦年較正するとより古くなる.

² : 本遺跡に近い正尺A遺跡では、4世紀に降灰したと推定される火山灰層の報告があり〔ト部・高浜2000〕、比較的多様な形態の火山ガラスが含まれている点や、角閃石が含まれている点などで特徴が似ているようにもみえる。この報告と今回では実施された方法が異なるために詳細は不明であるが、正尺A遺跡で可能性が指摘された浅間C軽石〔As—C、荒牧1968、新井1979〕は、今回得られた火山ガラスの屈折率よりもはるかに高い値(n: 1.514—1.520)〔町田・新井2003〕をもつ。したがって、少なくとも今回屈折率測定の対象となった試料にAs—C起源の火山ガラスが含まれる可能性は非常に低い。



第9図 下大久遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)



第10図 下大久遺跡の炭化種実

第Ⅶ章 総 括

第1節 下大口遺跡の土器について

A 出土土器の編年的位置づけ

新潟県内における古墳時代の土器編年は、『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』の「土器の分類と変遷」において示されている〔滝沢2005a〕。下大口遺跡からは古墳時代前期の土師器が一定量出土した。北陸北東部系とされる「く」の字の甕が圧倒的に多いこと、小型器台（42）、東海系高杯（58）の出現が挙げられることから、新潟シンポ編年の6期におさまるものと考えられる〔坂井・川村1993〕。一方、本遺跡で出土した装飾器台（62）は、破片の出土であり一部正確さを欠くが、正尺C遺跡で言うところの鏝付結合器台と考えられる。その盛行時期は7～8期が中心であることから、7期も若干含まれると考える〔滝沢2005a、土橋2006〕。また本遺跡では、東畿内系の柱状屈脚高杯が出土していないので、8・9期までは下らないだろう。

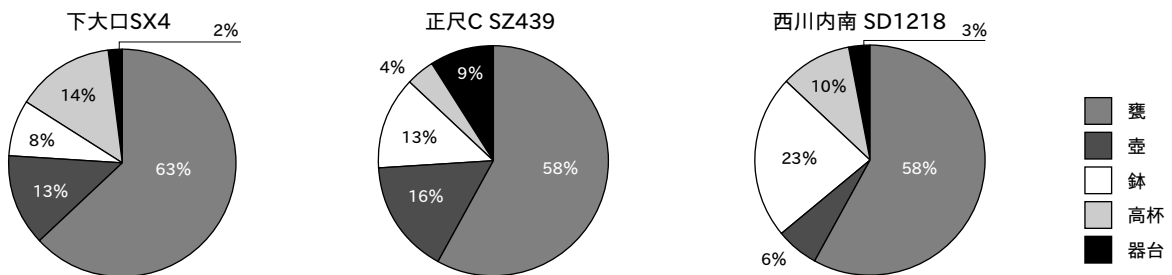
B 器種構成比率

次に、比較的まとまって遺物が出土したSX4の器種構成を阿賀北地域の同時期の遺跡と比較したい。上越市一之口遺跡東地区の計測方法〔春日1994〕にならい、土器を甕、壺、鉢、高杯、器台の5種に大別し、器種構成比率を検討する（第4表、第11図）。土器は口縁部残存率計測法〔宇野1992〕を用いて計測した。

SX4の器種構成比率は、甕61.7%、壺13.5%、鉢7.8%、高杯14.9%、器台2.1%である。同じ6期の正尺C遺跡SZ439、胎内市西川内南遺跡SD1218の甕の占める比率はいずれも58%と下大口遺跡に近い値となっている。正尺C遺跡では高杯と器台の組成比率が逆転しているという違いはあるが、その他の器種組成の面からも同時期の遺跡であるといえよう。しかしながら器種組成から遺跡・遺構の性格を読み取るという点においては、比較検討する資料数が十分でないことから、今後の資料を期待したい。

第4表 下大口遺跡SX4の器種構成比率

	甕	壺	鉢	高杯	器台	合計
口縁残存値	8.7	1.9	1.1	2.1	0.3	14.1
口縁数(点)	105.0	18.0	13.0	19.0	7.0	162.0
底部残存値	6.1	1.2	0.0	2.3	1.7	11.3
底部数(点)	11.0	3.0	0.0	17.0	7.0	38.0
総点数(点)	1236.0	312.0	39.0	177.0	39.0	1803.0
総重量(g)	11427.5	4535.8	236.7	2426.9	957.1	19584.0



第11図 遺跡別器種構成図

第2節 遺跡の性格

下大口遺跡からは、住居跡などの明確な生活痕跡は見つからなかったものの、一定量の遺物が出土していることと、SX4が近隣の正尺C遺跡の周溝に類似する点があることから集落の一部であったと考えられる。また、水田跡などの生産痕跡もないが、SX4からモミ痕の残る土器が出土したほか、自然科学分析により同遺構からイネのプラント・オパールや炭化米が検出されていることから、この遺跡の集団が、稲作を行っていた事が予想される。阿賀野川左岸の市内江南区にある古墳時代前期の東園遺跡においては、大量の炭化米が出土していることから、古墳時代の新潟市内においては稲作が一般化していたといえるだろう〔朝岡2003〕。

次に装飾性の強い土器が多く出土する点について述べたい。下大口遺跡においては、小面積の発掘調査でありながら、装飾器台(62)や蓋(30)などの赤彩された供献具が多数出土している。同じ旧大口川の自然堤防上に立地する正尺A・C遺跡、葛塚遺跡においても同様の傾向があり、両者との関連を想定させる。多少の時期的な変遷はあったとは思いますが、河川沿いに細長く形成された古墳時代の同一集落であったのではなかろうか。

これらの旧大口川沿いの遺跡が存在した古墳時代前期は、畿内政権が北陸勢力を足がかりとし、東北南部、会津、北信濃へと影響力を拡大した時期である。下大口遺跡においても、出土する土器のほとんどが北陸系である。北陸から日本海を航海し、阿賀野川河口から入ってきた集団の集落でないだろうか。この集団がさらに北を目指したのか、それとも阿賀野川を遡り会津へ行ったのかは不明であるが、下大口遺跡はその後江戸時代になるまで生活痕跡が見当たらない。

引用・参考文献

- ア 相田 泰臣 2005 「信濃川左岸地域の様相」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』「シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
- 朝岡 政康 2003 『東園遺跡 卸売市場建設に伴う市道東 8-273 建設事業用地内発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- ウ 宇野 隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 国立歴史民俗博物館
- エ 遠藤 恭雄 2004 『下前川原遺跡 新潟県豊栄市下前川原発掘調査報告』 豊栄市教育委員会
- オ 尾崎高宏ほか 2001 「出土土器の編年的位置づけ」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅱ 正尺 A 遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- カ 春日 真実 1994 『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一ノ口遺跡東地区』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日 真実 1999 「第 4 章古代 第 2 節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 高志書院
- 加藤 学ほか 2001 「正尺 C 遺跡」『平成 12 年度 新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子 拓男 1983 『緒立遺跡発掘調査報告書』新潟県黒埼町教育委員会
- サ 坂井秀弥ほか 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「越後における古墳出現前後の土器様相」『磐越地方における古墳形成過程の研究』磐越地方における古墳形成過程の研究者グループ
- セ 関 雅之 1993 『上土地亀遺跡』豊栄市教育委員会
- 関 雅之 1999 『葛塚遺跡』豊栄市教育委員会
- 関 雅之ほか 1988 『豊栄市史』資料編Ⅰ考古編 豊栄市
- 関 雅之ほか 1989 『新五兵衛山遺跡Ⅰ』豊栄市教育委員会
- 関 雅之ほか 1996 『新五兵衛山遺跡Ⅱ』豊栄市教育委員会
- 関 雅之ほか 2005 『甲山遺跡 豊栄インター南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告』豊栄市教育委員会
- 関 雅之ほか 2005 『市内遺跡確認調査報告書 法花鳥屋 B 遺跡 狐川渡遺跡』豊栄市教育委員会
- タ 滝沢 規朗 2005a 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』「シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
- 滝沢 規朗 2005b 「新潟県における古墳時代前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
- 田中久男ほか 1996 「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第 35 巻 3 号 日本第四紀学会
- ト 土橋由理子ほか 2006 『日本海東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅷ 馬見坂遺跡 正尺 A 遺跡 正尺 C 遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ニ 新潟市史編さん原始古代中世史部会 1994 『新潟市史』資料編 1 原始古代中世 新潟市
- 新潟市 2007 『新潟市の遺跡』新 新潟市歴史双書 2 新潟市
- ノ 野田豊文・野水晃子 2005 「阿賀北地域の様相」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』「シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
- 野水晃子ほか 2006 『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ 西川内北遺跡 西川内南遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ハ 長谷川伸ほか 1998 『豊栄市史 通史編』豊栄市
- マ 松井 智 2001 「豊栄市正尺の立地—正尺集落と正尺遺跡から—」『研究紀要』3 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ワ 渡邊ますみほか 1994 『緒立 C 遺跡発掘調査報告書』黒埼町教育委員会

別表1 下大口径遺跡主要遺構計測表

図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規 模 (m)				底面座標 (m)	形 態		遺物の有無	遺物図版頁	
						上 端		下 端			深 度	平 面			断 面
						長軸	短軸	長軸	短軸						
4・5	SD1	2B5・10、2C1・2・3・6・7・8	近世	Ⅲ	N-89°-E	2.50	—	—	—	—	—	皿形	○	8・9	
4・5	SX2	2B9・13・14・18・19・23・24、3B2・3・4・7・8	近世	Ⅲ	N-7°-E	2.50	—	1.80	—	0.04	0.90	(不整形) 箱形	○	7	
4・5・6	SX4	1C16・17・21・22・23、2C1・2・3・6・7・8	古墳	Ⅵ	N-22°-W	(7.1)	(3.5)	(3.0)	(0.4)	0.42	0.61	(不整形) 皿形	○	7・8	
4・5	SK6	1C21	古墳	Ⅵ	N-20°-E	1.20	1.00	0.80	0.70	0.20	0.66	楕円形 箱形	○	7	
4・5	Pit 5	2C1	古墳	Ⅵ	N-62°-W	0.40	0.40	0.21	0.18	0.18	0.82	円形 半円形	○		

別表2 下大口径遺跡古墳時代土器観察表 (1)

凡 例

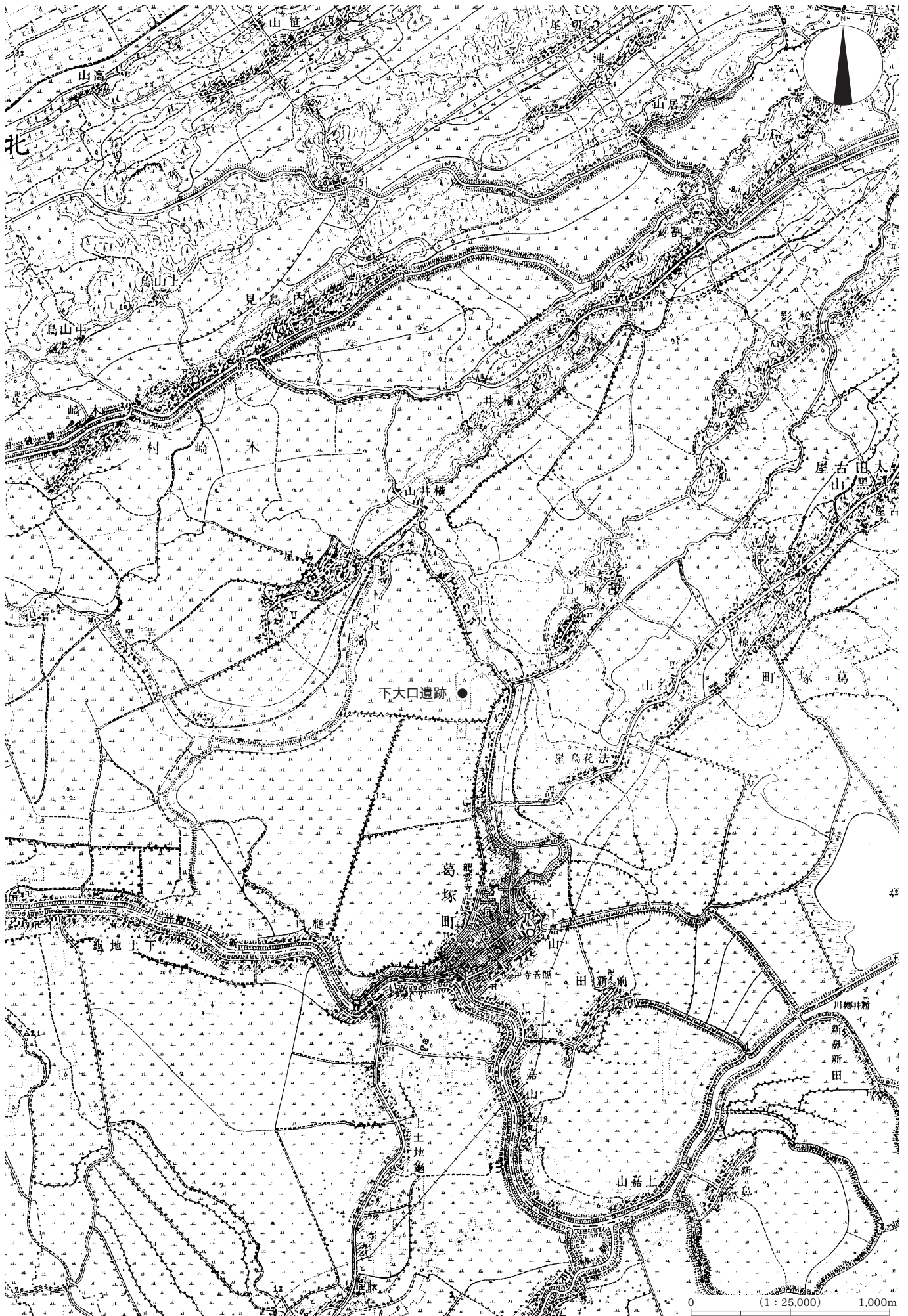
- 1 出土位置 遺構名・グリッド名を記した。 4 胎 土 胎土に含まれる鉱物・小礫について記した。「石」は石英粒、「長」は長石粒、
2 器種・分類 第V章に記した。 「雲」は金雲母または黒雲母、「チ」はチャート、「焼」は焼土粒、「海」は海綿骨針を示す。
3 法 量 口径・底径・器高を示す。括弧付の数値は遺存率の低いものである。 5 遺 存 率 分数表示で遺存割合を示した。

図版 No.	報告書 No.	出土位置			種別	器種	分類	法 量 (cm)			胎 土		色 調	焼 成	調 整		遺 存 率			備 考
		遺構名	グリッド	層位				口径	底径	器高	含有物	密度			外 面	内 面	口縁部	底 部	全 体	
7	1	SK6	1C21		土師器	甕	C	14.8			石・長・焼	普通	浅黄橙 (7.5YR8/3)	普通	体：ハケメ	体：ハケメ 輪積み痕	4/36			
7	2	SK6 SX4	1C21 1C22	2層	土師器	甕	C	20.9			石・長・雲・チ	粗	浅黄橙 (10YR8/3)	普通	体：ハケメ	口・体：ハケメ 板ナデ	4/36			
7	3	SX2	3B8		土師器	甕	C	13.2	3.8	16.1	石・長	粗	灰白 (10YR8/2)	普通	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメ 輪積み痕	2/36	36/36	19/36	体部外面にスス付着
7	4	SX2	3B7		土師器	甕	B	15.9			石・長・雲・焼・白	普通	浅黄 (2.5Y7/4)	普通	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメ 板ナデ 輪積み痕	15/36			
7	5	SX2	3B7		土師器	甕			2.4		石・長・焼	粗	灰白 (10Y7/1)	不良	体：ハケメ	体：ハケメ	36/36			摩滅
7	6	SX2	3B7		土師器	壺			5.9		石・長・雲・チ	普通	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	体：ハケメのちミガキ 底：ミガキ	体：ハケメ	36/36			
7	7	SX2	3B7		土師器	鉢	A	(17.8)			石・長・チ・焼	普通	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	口：ハケメのちナデ	口：ナデ 輪積み痕	2/36			
7	8	SX2	3B7		土師器	高杯	A	(15.8)			石・長・雲	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	口：ヨコナデ 受：ハケメ	受：ハケメ	5/36			
7	9	SX2	3B8		土師器	器台	A	8.6			石・長	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	受：ミガキ	受：ミガキ	5/36			
7	10	SX4	2C2	3層	土師器	甕	C	14.0			石・長	粗	淡黄 (5Y8/3)	良好	体：ハケメ	輪積み痕	7/36			
7	11	SX4	1C22	2層	土師器	甕	C	15.8			石・長・焼	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	不良	体：ハケメ	体：ハケメ 輪積み痕	5/36			
7	12	SX4	2C2	2層	土師器	甕	C	15.8			石・長・雲	粗	浅黄橙 (10YR8/3)	不良	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ナデ 輪積み痕	9/36			体部外面にスス付着
7	13	SX4	2C7	1層 2層	土師器	甕	C	(17.2)			石・長・雲・焼	普通	灰黄 (2.5Y6/2)	普通	口：ヨコナデ 体：ハケメ	輪積み痕	1/36			
7	14	SX4	2C1 2C2 2C7	1層 2層 3層	土師器	甕	C	18.6			石・長・雲・チ	粗	にぶい黄褐 (10YR5/4)	普通	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメのちナデ 輪積み痕	35/36			口縁部にモミ痕
7	15	SX4	2C1 2C2		土師器	甕	C	18.7			石・長・雲	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメ	13/36			体部外面にスス付着
7	16	SX4	2C2	3層	土師器	甕	C	19.0			石・長・雲	普通	灰黄 (2.5Y7/2)	良好	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメ 輪積み痕	21/36			
7	17	SX4	2C2	3層 V層	土師器	甕	C	24.2			石・長・雲	粗	淡黄 (2.5Y8/3)	不良	口：ヨコナデ 体：ハケメ		3/36			摩滅
7	18	SX4	2C2	3層	土師器	甕			4.2		石・長・雲	密	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	体：ハケメのちナデ 底：無調整	体：ハケメ	36/36			壺の可能性有
7	19	SX4	2C2	2層	土師器	甕			3.5		石・長・雲・焼・白	普通	灰黄 (2.5Y6/2)	良好	体：ハケメ		36/36			
8	20	SX4	2C3 2C7	1層	土師器	甕	A	18.8			石・長・雲・チ	粗	淡黄 (2.5Y8/3)	普通	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメ 板ナデ	7/36			
8	21	SX4	2C2	2層 3層	土師器	甕	B	19.8			石・長・雲	普通	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	口：ヨコナデ 体：ハケメ	体：ハケメ 板ナデ 輪積み痕	2/36			
8	22	SX4	1C21 2C2 2C3	2層 IV層	土師器	甕	B	20.6			石・長・チ	普通	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ハケメのちナデ	10/36			
8	23	SX4	1C21	2層	土師器	甕	B	21.2			石・長・雲・チ	粗	淡橙 (5YR8/3)	良好	口：ヨコナデ 体：ハケメ	口：ナデ 体：ハケメ 板ナデ 輪積み痕	8/36			
8	24	SX4	2C7 2C2	3層 3層	土師器	壺	E	10.0			長・チ・白	密	灰白 (10YR8/2)	良好	口：ハケメのちミガキ	口：ハケメのちミガキ	29/36			内外面 赤彩
8	25	SX4	2C7	2層	土師器	壺	C	(10.8)			長・雲	密	黄橙 (2.5Y8/3)	良好	口：ミガキ	口：ミガキ	1/36			
8	26	SX4	2C7	2層	土師器	壺	D	(11.8)			長・チ・白	普通	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	口：ミガキ	口：ミガキ 体：ハケメ	1/36			摩滅 口縁内外面 体部外面に赤彩

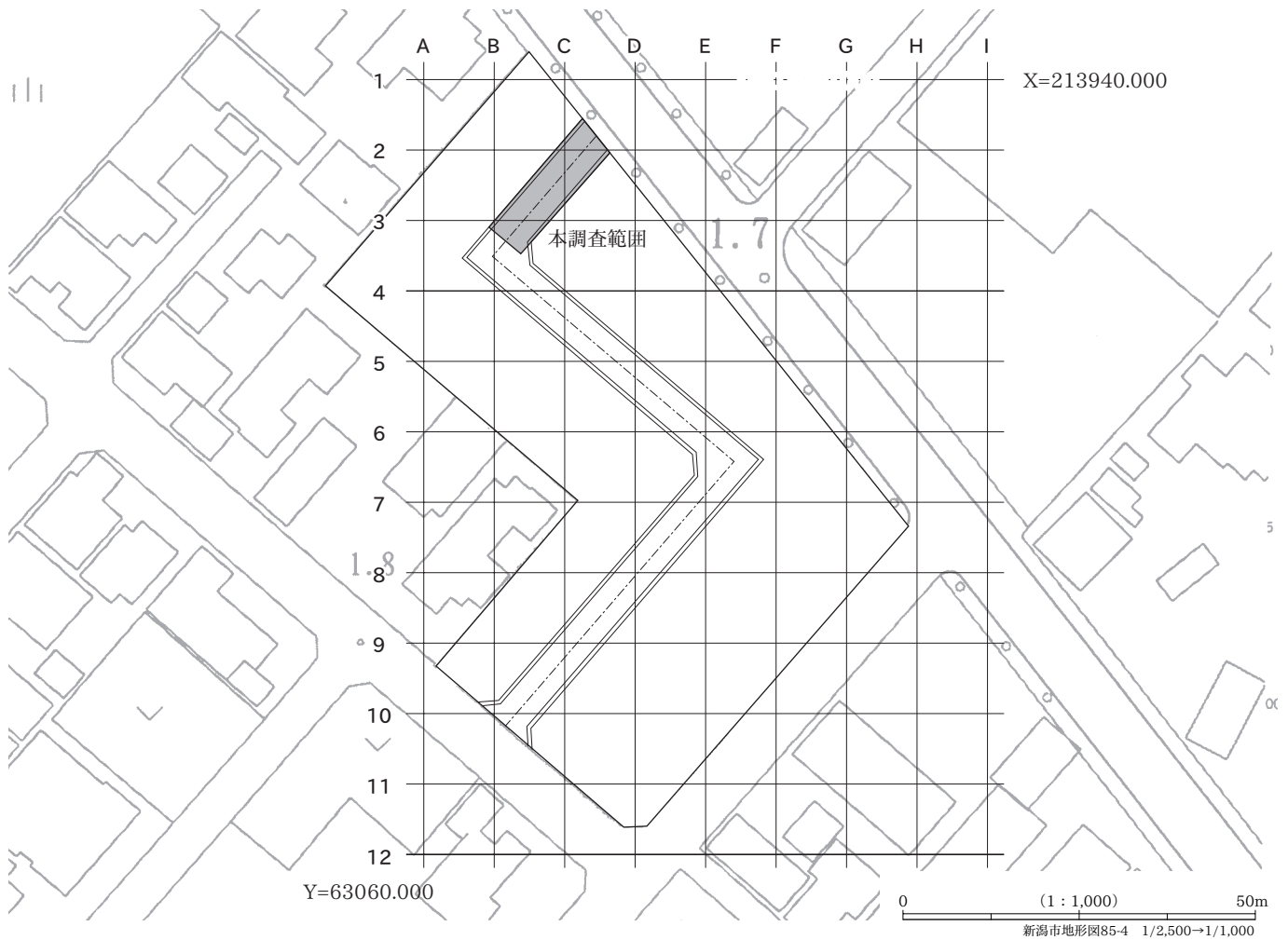
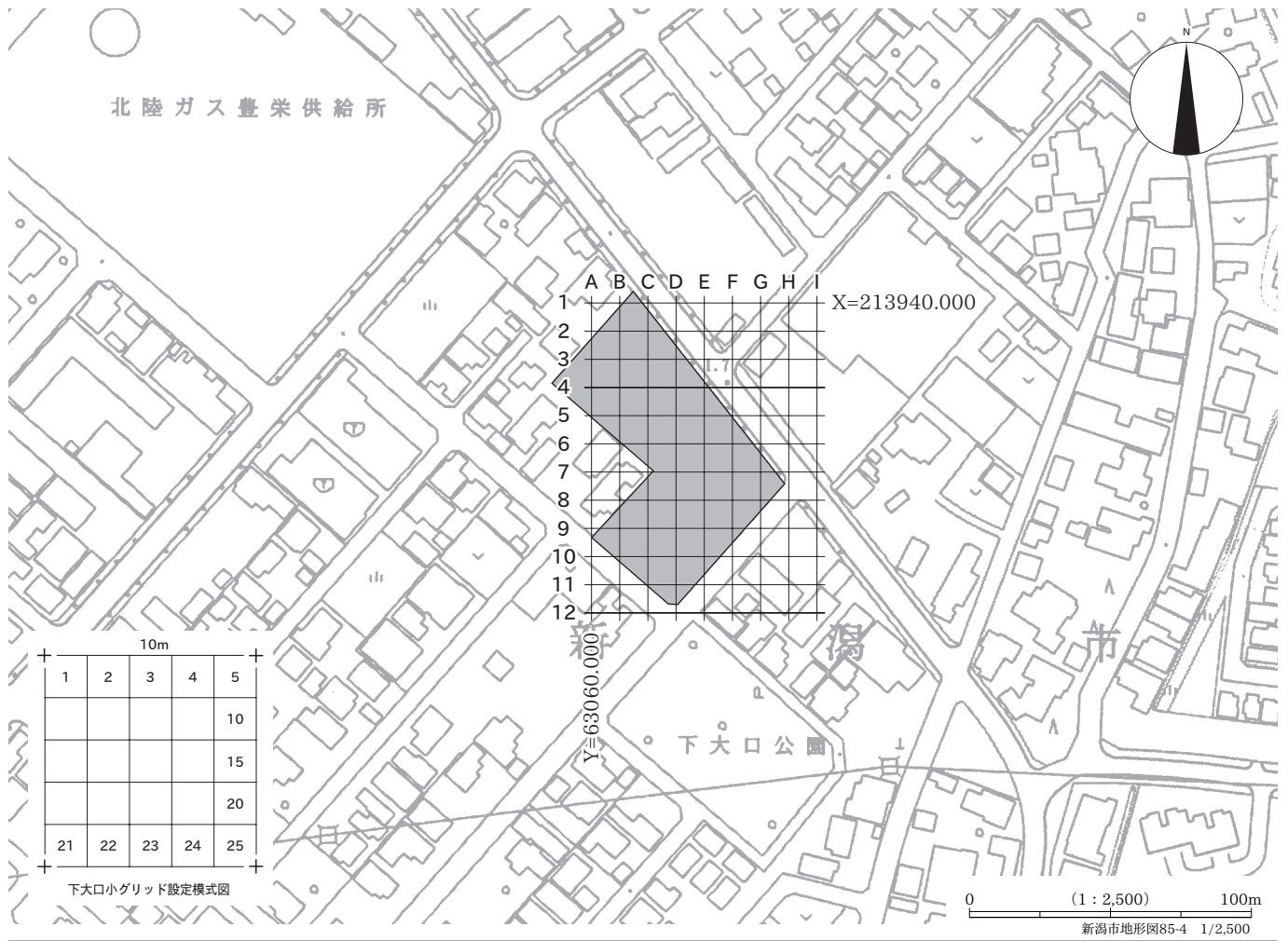
別表2 下大口径遺跡古墳時代土器観察表(2)

図版 No.	報告 書No.	出土位置			種別	器種	分類	法量 (cm)			胎土		色調	焼成	調整		遺存率			備考		
		遺構名	グリッド	層位				口径	底径	器高	含有物	密度			外面		内面		口縁部		底部	全体
															口	体	口	体				
8	27	SX4	2C2	3層	土師器	壺	C				石・長・雲・白	密	灰白 (2.5Y7/1)	良好	類: ハケメのちミガキ	類: ハケメ						
8	28	SX4	1C21	2層	土師器	壺	B				石・長・チ	普通	黄灰 (2.5Y6/1)	良好	口: ナデ	口: ハケメ				No.29と同一個体		
8	29	SX4	1C21	2層	土師器	壺	B				石・長・チ	粗	灰白 (2.5Y8/2)	普通	類: ヨコナデ 体: ハケメのちミガキ	類: 体: ハケメ				No.28と同一個体		
8	30	SX4	2C2	3層	土師器	蓋		5.2	4.2	2.1	石・長・チ・白	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	普通		ナデ	2/36	27/36	14/36	沈線6条,穿孔2,外面赤彩		
8	31	SX4	2C2	3層 2層	土師器	鉢	A	13.8			石・長・雲・チ	密	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	口: ヨコナデ 体: ハケメ	体: ハケメ	11/36			外面体部にスス付着		
8	32	SX4	2C2	2層	土師器	鉢	B				石・長・焼	粗	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	体: ハケメ	体: ハケメ						
8	33	SX4	2C2	3層	土師器	高杯	A	17.8			石・長・雲	密	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	4/36					
8	34	SX4	2C7	2層	土師器	高杯	B	(17.8)			長・焼	密	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	2/36			内外面赤彩		
8	35	SX4	2C2	2層	土師器	高杯	A	20.6			石・長・雲	密	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	5/36			内外面赤彩		
8	36	SX4	2C2 1C21 1C22	2層 2層	土師器	高杯	B	(24.8)			石・チ	密	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	1/36			内外面赤彩		
8	37	SX4	2C2	2層	土師器	高杯	A	17.8			石・長	密	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	4/36			内外面赤彩		
8	38	SX4	2C7	1層	土師器	高杯	A	(20.8)			石・長・雲	普通	淡黄 (2.5Y8/3)	普通	受: ミガキ	受: ミガキ	1/36			内外面赤彩		
8	39	SX4	2C8	1層	土師器	高杯					石・長・焼	密	灰 (5Y6/1)	良好	脚: ミガキ	頸: しぼり痕 脚: ハケメ				外面赤彩 脚部に透孔3ヶ所		
8	40	SX4	2C2	3層	土師器	高杯			9.8		石・長・焼	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	普通	受: 脚: ミガキ	受: ミガキ 脚: ハケメ		14/36				
8	41	SX4	1C21 1C23 2C2	IV層 IV層	土師器	高杯			12.4		石・長・焼	密	灰白 (10YR8/2)	良好	脚: ミガキ	受: ミガキ 脚: ハケメ	28/36			受部内面、脚部外面赤彩 脚透孔4ヶ所、はく離痕		
8	42	SX4	2C2	1層	土師器	器台	A	8.4			石・長・雲	密	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	受: ミガキ	受: ナデ	13/36					
8	43	SD1	2C2		土師器	壺	D	(14.2)			石・長・雲	普通	灰 (7.5Y4/1)	良好	口: ヨコナデ	口: ハケメのちナデ	1/36					
8	44	サブトレ	1C21		土師器	甕	C	14.8			石・長・雲	普通	にぶい黄橙 (10YR7/2)	普通	口: ハケメ	口: ナデ	7/36					
8	45	サブトレ	1C23	V層	土師器	甕	C	(17.8)			石・長・雲	普通	浅黄橙 (7.5YR7/3)	良好	口: ヨコナデ 体: ハケメ	体: ハケメ	9/36					
8	46	サブトレ	1C23	V層	土師器	甕		4.9			石・長・チ	粗	浅黄橙 (7.5YR8/6)	普通				36/36		貼りつけ高台		
9	47	サブトレ	2C3		土師器	甕	B	17.8			石・長・雲・チ	粗	浅黄橙 (10YR8/4)	普通	口: ヨコナデ 体: ハケメ	口: ヨコナデ	4/36			外面スス付着		
9	48	サブトレ	1C21		土師器	甕	B	18.8			石・長・雲	粗	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	口: ヨコナデ	口: ヨコナデ	3/36					
9	49	サブトレ	1C22	V層	土師器	甕	B	19.6			石・長・チ	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	不良	体: ハケメ	体: ハケメ	13/36			外面スス付着		
9	50	包含層	1C21	V層	土師器	甕	B	(21.4)			石・長・雲・海	普通	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	口: ヨコナデ	口: ヨコナデ	3/36					
9	51	包含層	1C22	IV層	土師器	壺	B	19.8			石・長・雲・チ・焼	普通	灰白 (10YR7/1)	不良	口: ミガキ	口: ミガキ	2/36					
9	52	サブトレ	1C23	V層	土師器	壺	A				石・長・雲	粗	灰白 (7.5Y7/1)	普通	口: ミガキ	口: ミガキ	7/36			外面赤彩、沈線1条		
9	53	サブトレ	1C23		土師器	壺	B	23.8			石・長・白	密	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	口: ハケメ	口: ハケメ	3/36			外面裝飾はく離痕、内面炭化物付着		
9	54	サブトレ	1C23		土師器	壺	C	15.6			石・長・雲	普通	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	口: ヨコナデ 体: ハケメ	体: ハケメ 板ナデ	10/36					
9	55	サブトレ	2C3		土師器	高杯	A	10.1			石・長・雲	密	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	8/36			外面赤彩		
9	56	サブトレ	1C23		土師器	高杯	A		11.2		石・雲・チ	普通	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	受: 脚: ハケメ	受: 脚: ハケメ		16/36				
9	57	サブトレ	1C21 1C23	IV層 V層	土師器	高杯	A	12.5	11.8	11.2	石・長・白	普通	浅黄橙 (10Y8/4)	良好	受: ミガキ 脚: ハケメ	受: ミガキ・ヨコナデ 脚: ハケメ	25/36	6/36	15/36			
9	58	サブトレ	2C3 1C23	V層	土師器	高杯	C	20.9			石・長	密	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	受: ハケメのちミガキ	受: ミガキ	4/36					
9	59	サブトレ	1C21		土師器	高杯					石・長・焼	密	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	脚: ミガキ	受: ミガキ 脚: ハケメ				脚透孔4ヶ所		
9	60	サブトレ	1C22	IV層	土師器	器台			11.3		石・白	密	浅黄橙 (10YR8/3)	普通	脚: ミガキ	受: ミガキ 脚: ハケメのちナデ		36/36		受部内外面、脚部外面赤彩		
9	61	サブトレ	2C2	IV層	土師器	器台	B	8.7			石・雲・焼	密	浅黄 (2.5Y8/3)	良好	受: ミガキ	受: ミガキ	3/36			内外面赤彩		
9	62	サブトレ	1C23	V層	土師器	裝飾器台	C				石・長・チ	普通	浅黄橙 (7.5YR8/4)	良好	受: ミガキ・ナデ	受: ミガキ	11/36			内外面赤彩 鐫付き		
9	63	サブトレ	2C3		土師器	器台			12.6		石・長	密	灰白 (10YR8/1)	良好	脚: ミガキ	脚: 板ナデ		25/36		外面赤彩		
9	64	包含層	確認8T	II層	土師器	甕	C	16.8			石・長・雲	粗	灰黄 (2.5Y7/2)	良好	口: ヨコナデ	口: ヨコナデ 体: ハケメ	7/36					
9	65	SD1	2C2		自然礫	軽石														擦痕		

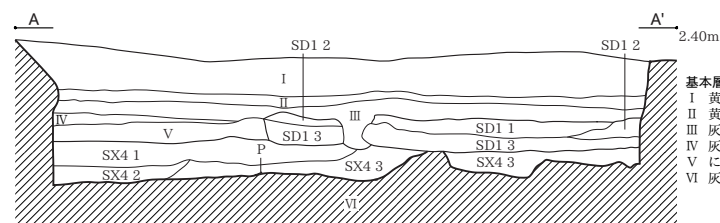
圖 版



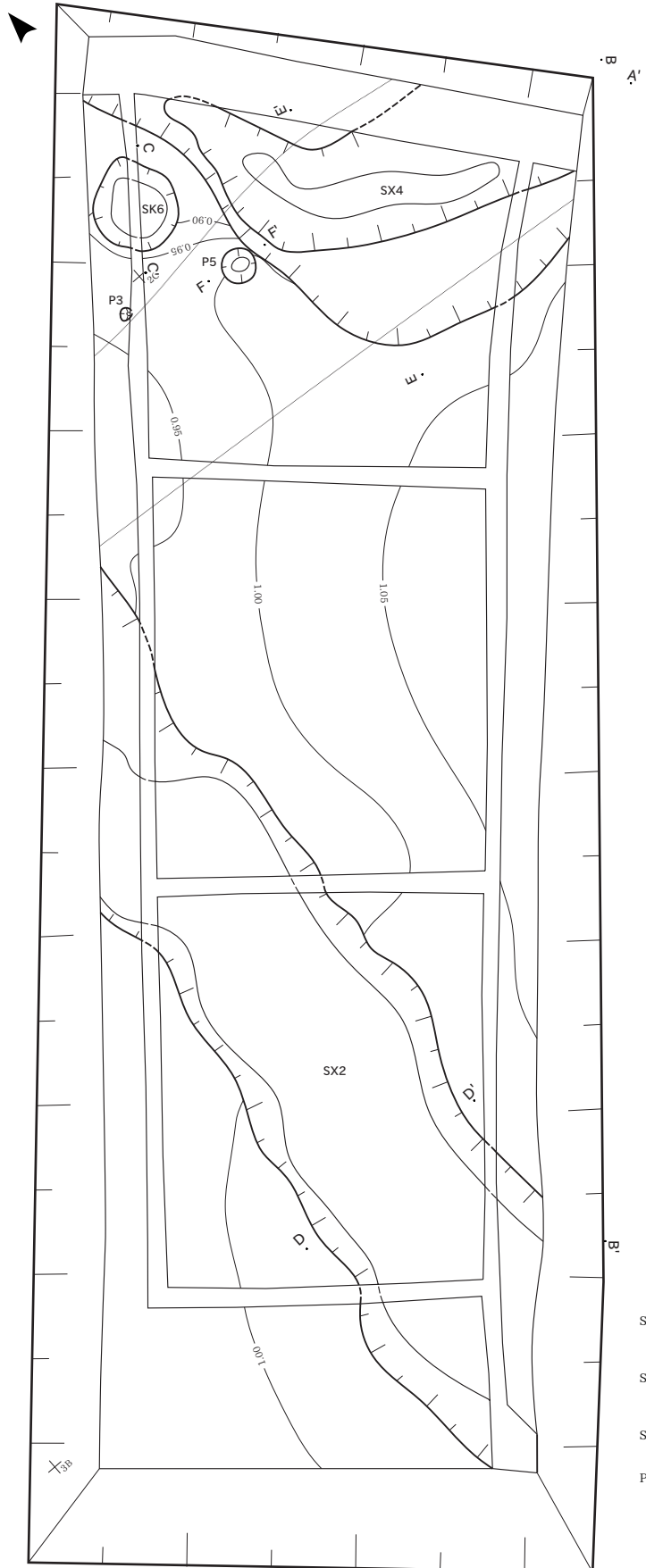




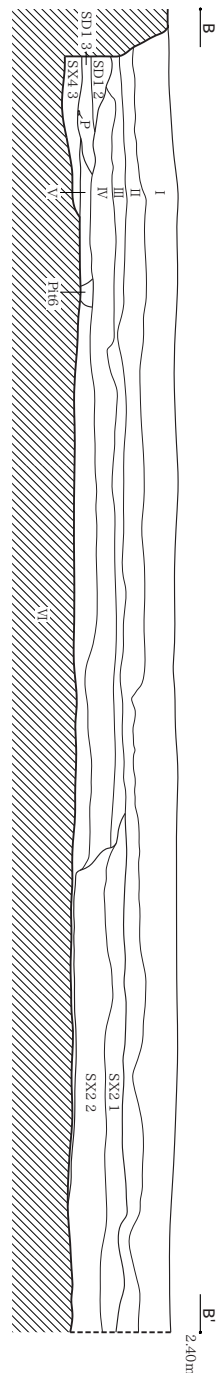
北東壁セクション



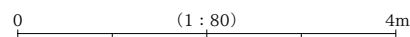
- 基本層序
- I 黄褐色砂 (2.5Y5/4) 盛砂。
 - II 黄褐色砂 (2.5Y4/1) しまりあり、粘性なし。
 - III 灰色砂質土 (5Y5/1) 近世遺物、炭化物混。
 - IV 灰黄色砂質土 (10YR5/2)
 - V におい黄褐色粘土 (10YR7/2) しまりあり、粘性あり。古墳時代包含層。
 - VI 灰白色シルト (2.5Y7/1) 褐色砂が多く混じる。しまりやや弱、粘性あり。確認面。

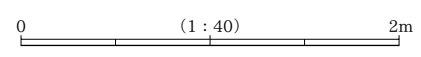
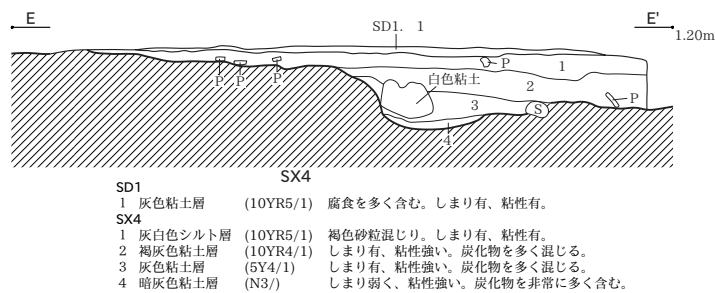
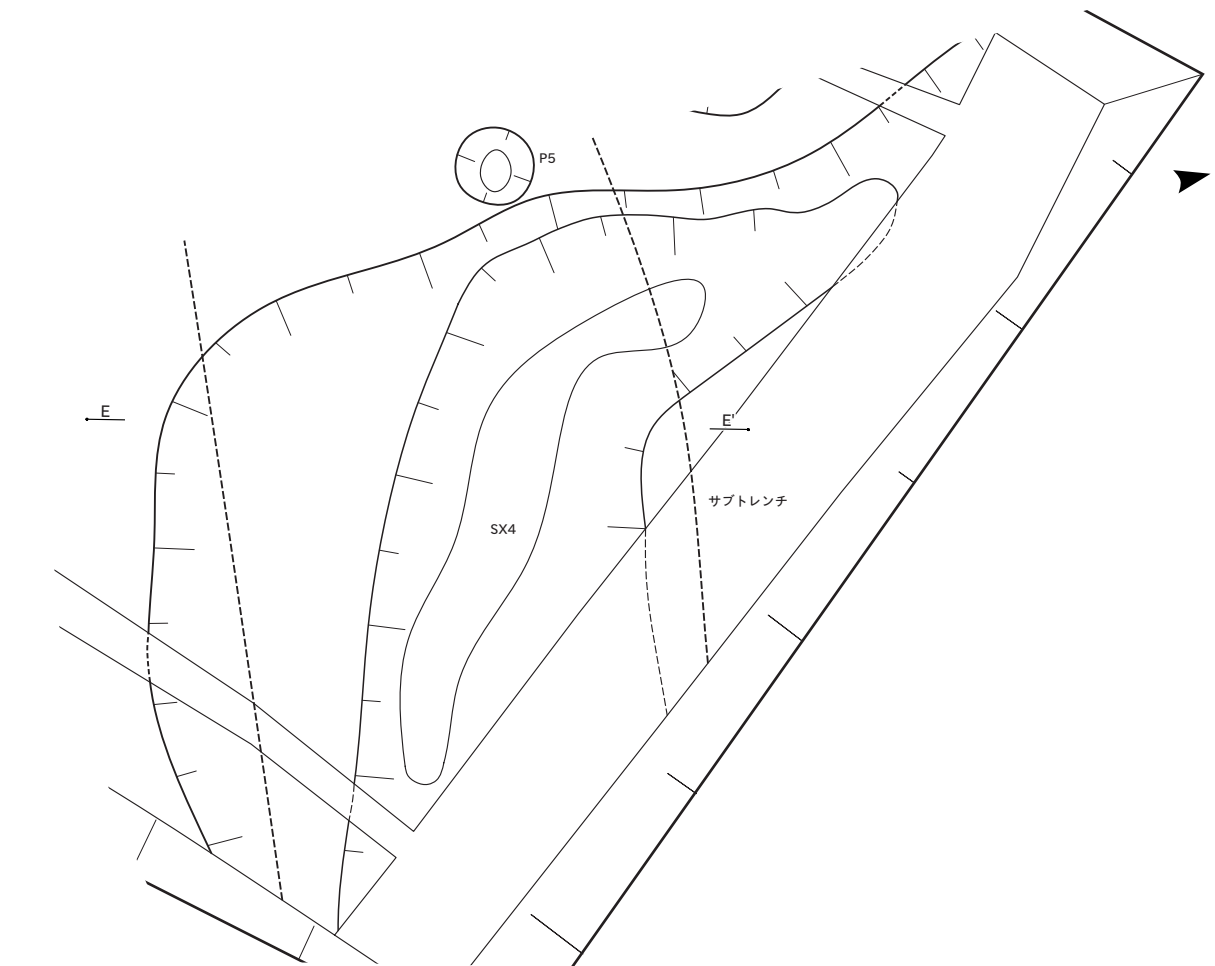
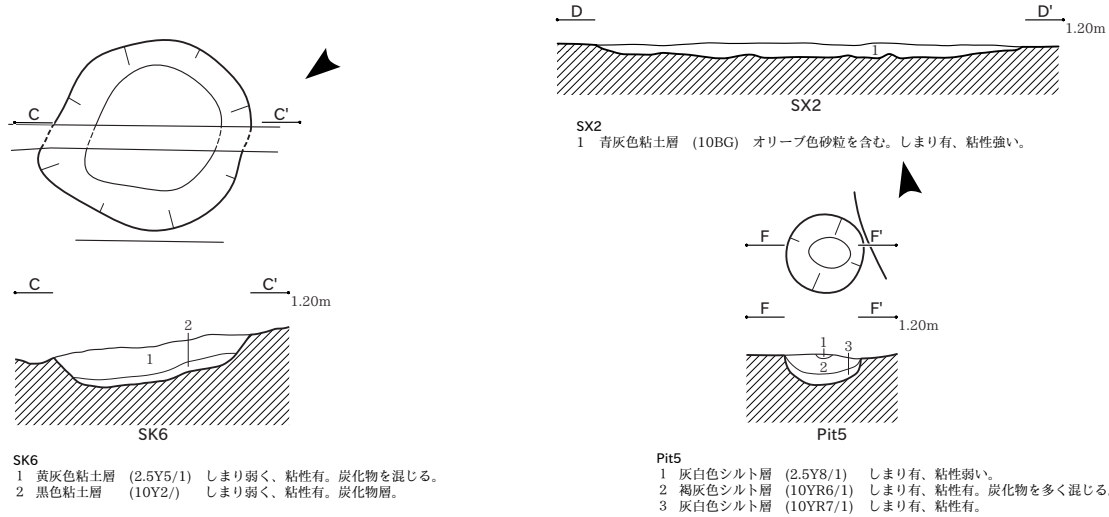


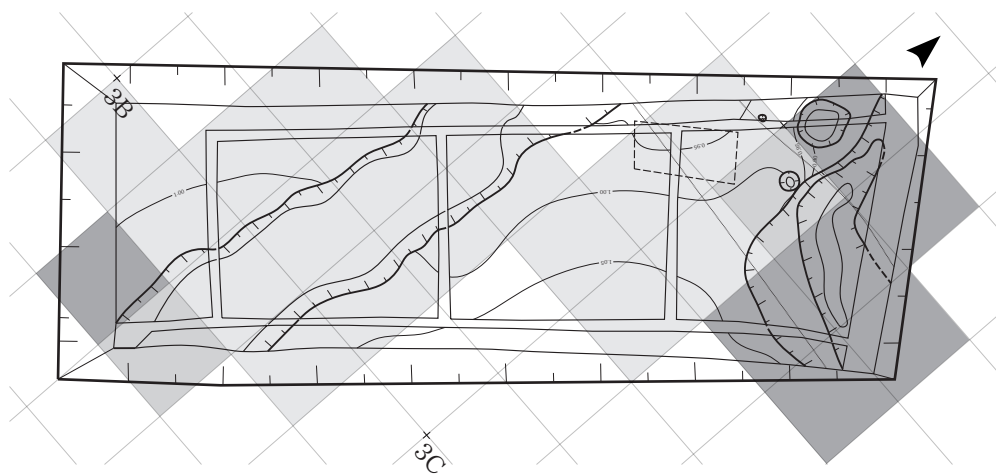
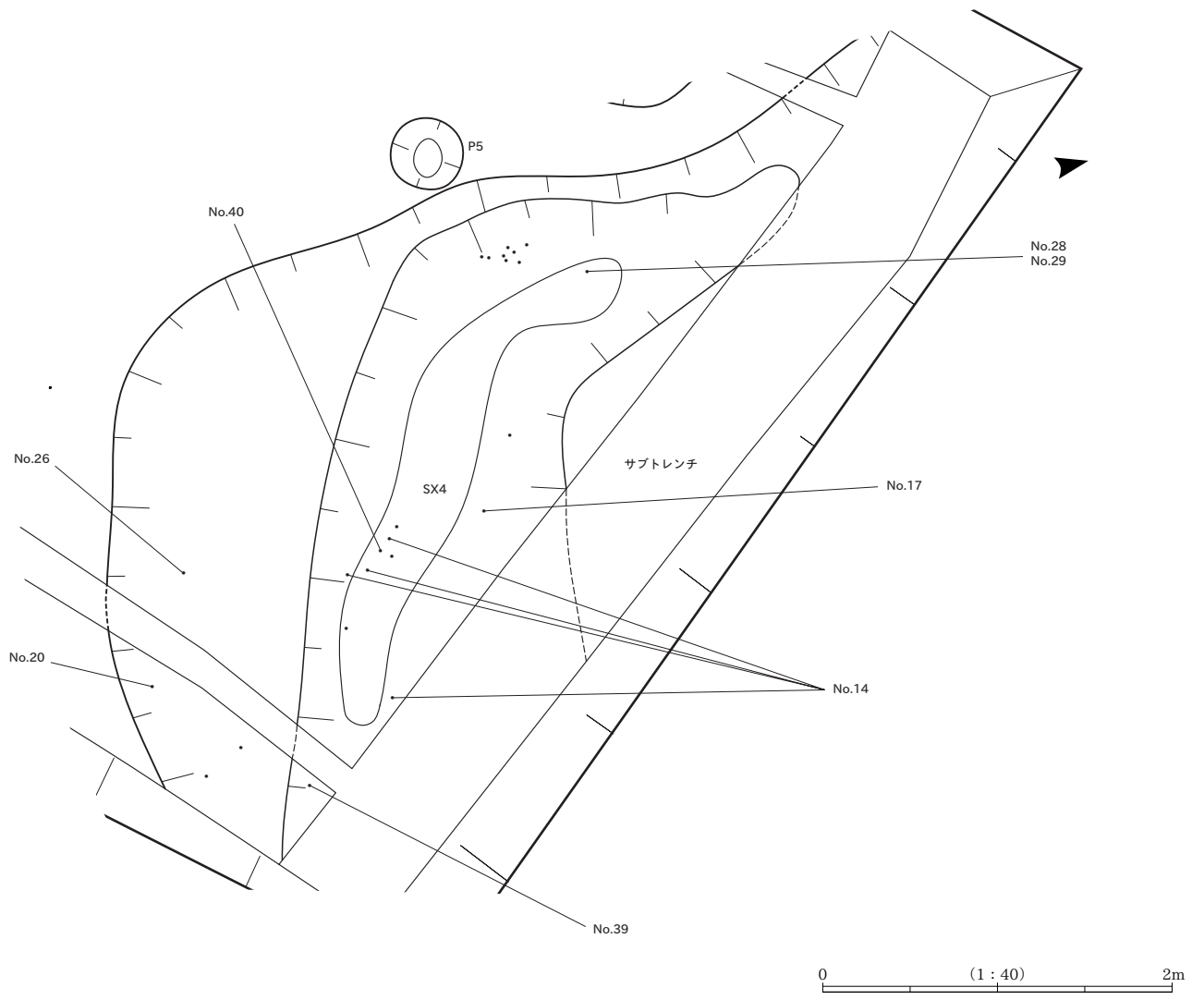
南東壁セクション



- SD1 1 灰黄褐色シルト (10YR5/2) しまりあり、粘性あり。腐植混。
- 2 緑灰色粘土 (10G5/1) しまりあり、粘性あり。
- 3 灰色粘土 (10Y5/1) しまりあり、粘性強。腐植混。近世遺物多。
- SX4 1 灰白色シルト (10YR5/1) 褐色砂粒混じる。しまりあり、粘性あり。
- 2 褐色粘土 (10YR4/1) しまりあり、粘性強。炭化物多。
- 3 灰色粘土 (5Y4/1) しまりあり、粘性強。炭化物多。
- SX2 1 オリーブ灰色粘土 (5GY5/1) しまりあり、粘性強。炭化物混。
- 2 青灰粘土 (10BG) しまりあり、粘性強。古墳・近世遺物多。
- Pit6 灰黄褐色シルト (10YR4/2) しまりあり、粘性あり。炭化物混。





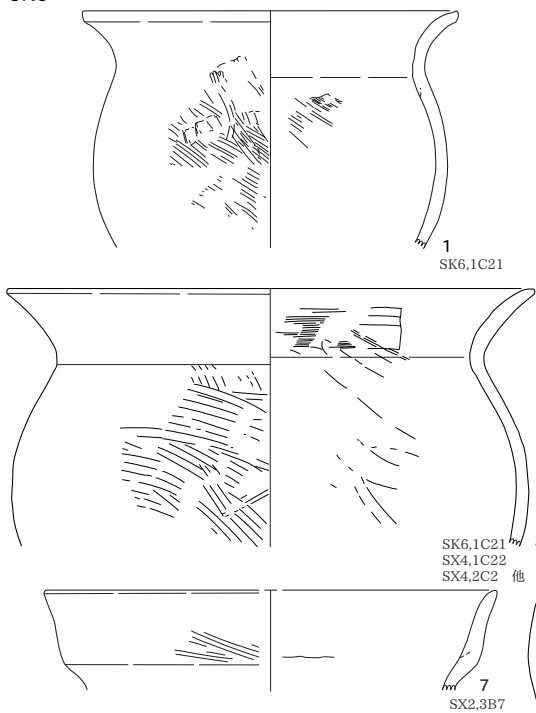


凡例

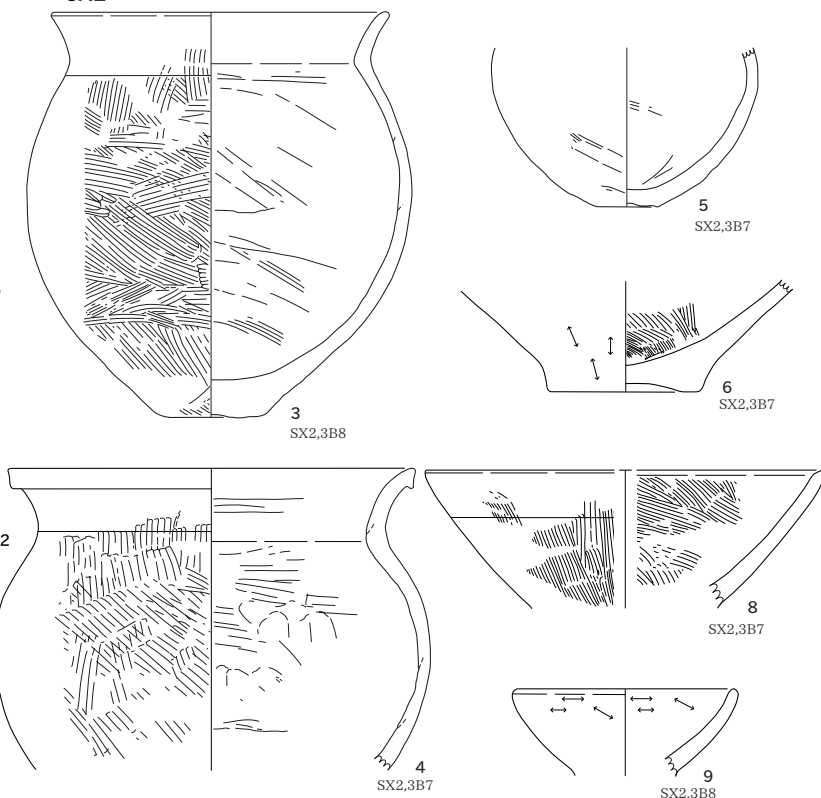
- 0
- 1~500g
- 501~1000g
- 1001g~

小グリッド別出土土器重量分布図

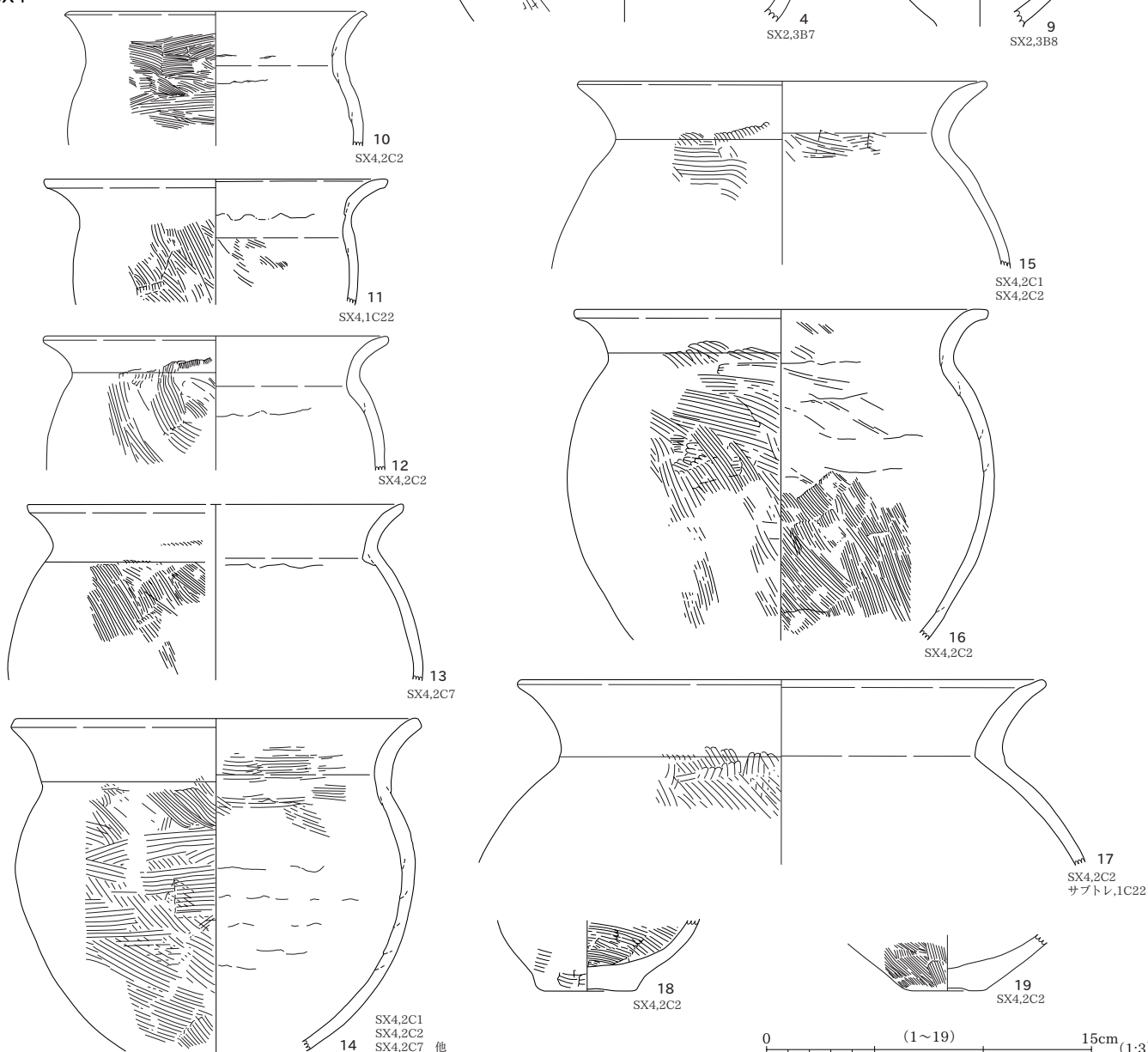
SK6

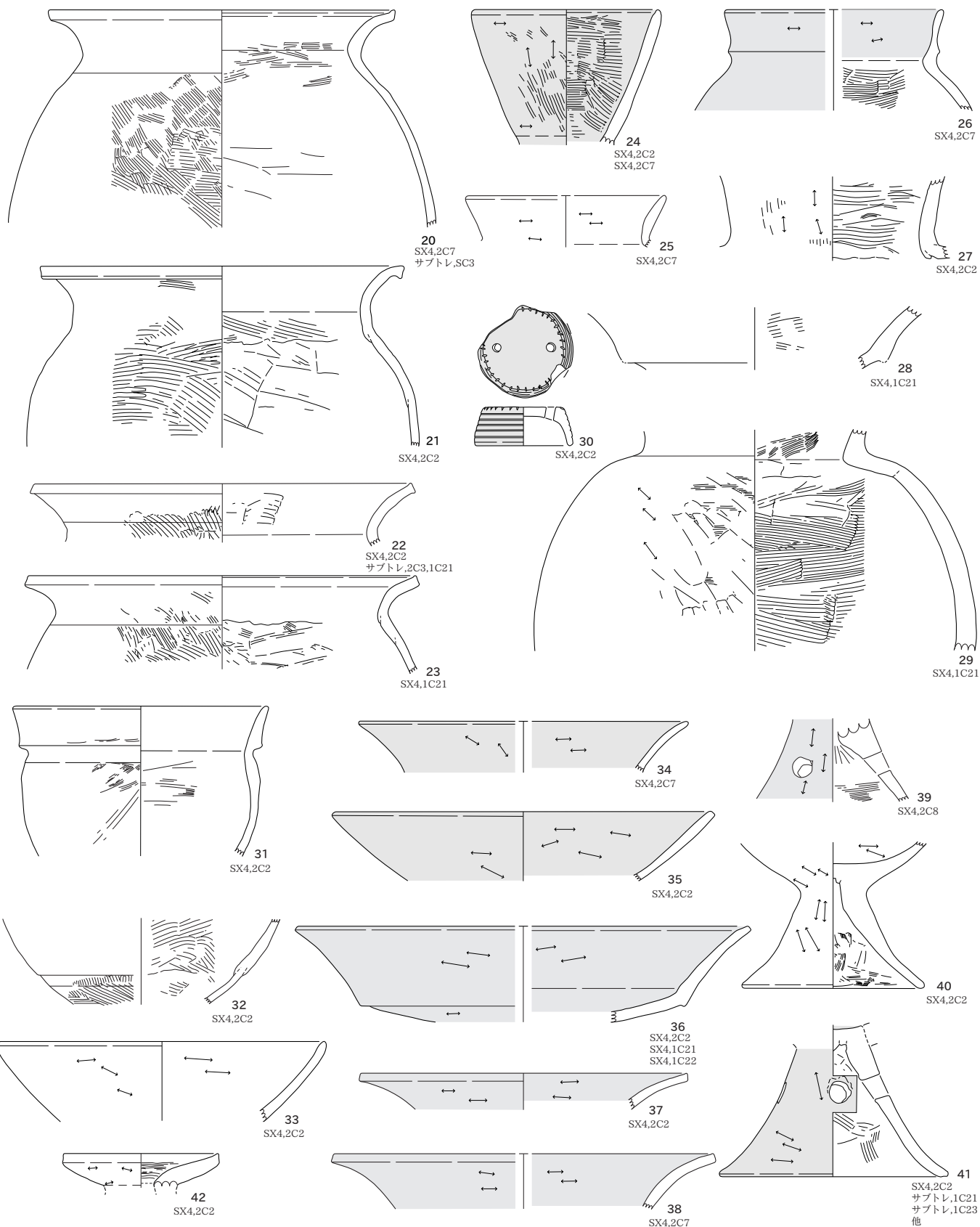


SX2



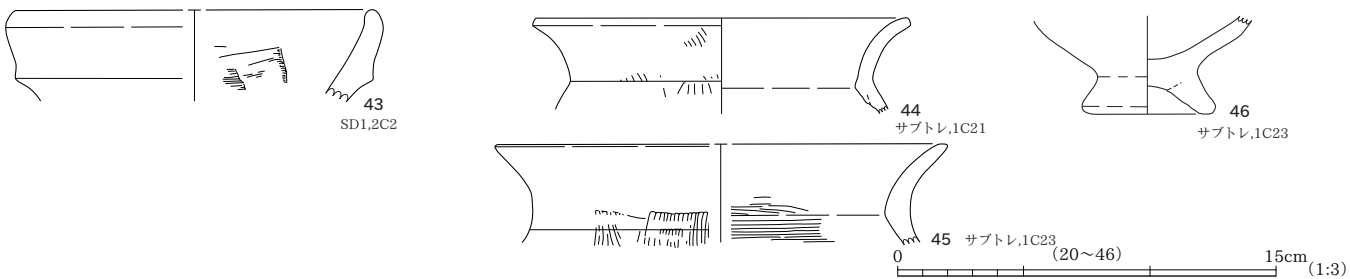
SX4

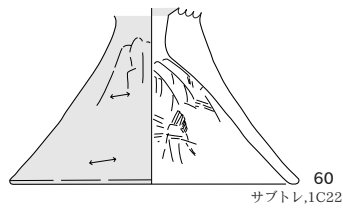
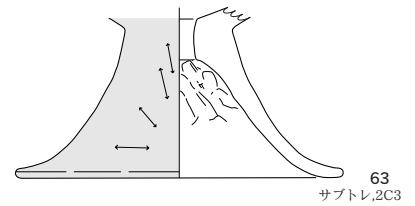
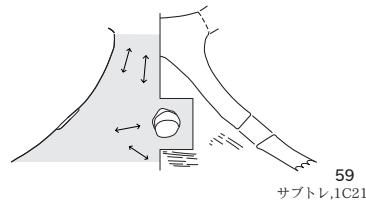
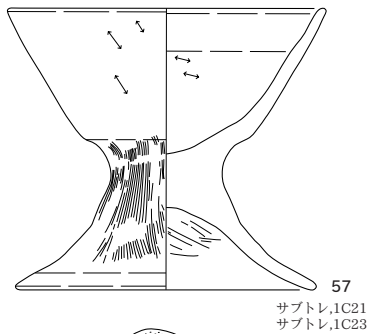
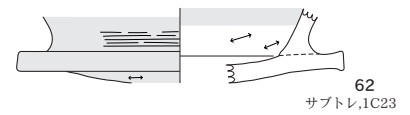
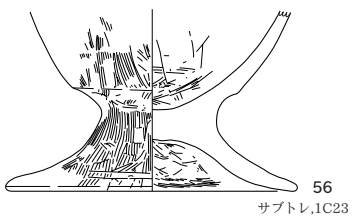
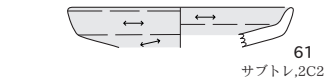
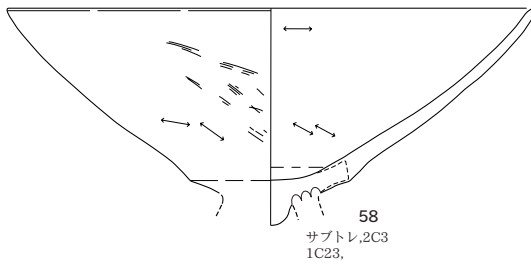
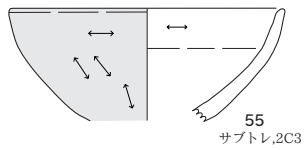
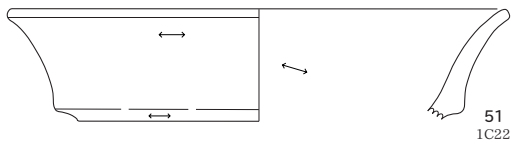
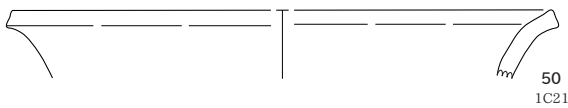
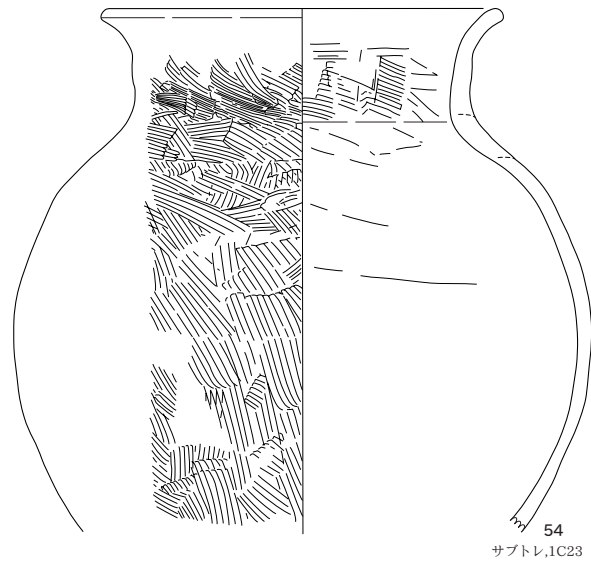
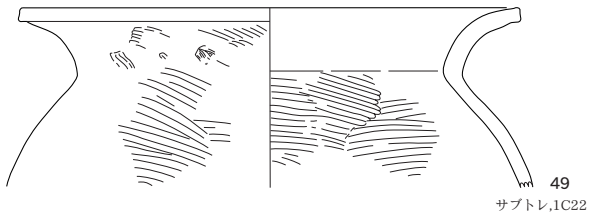
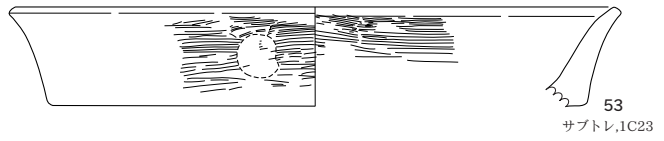
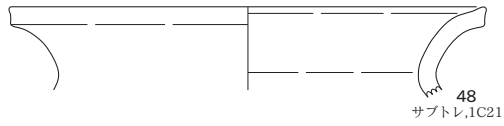
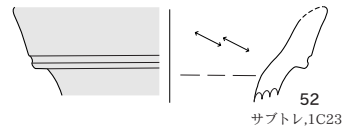
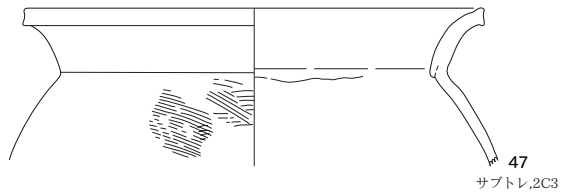




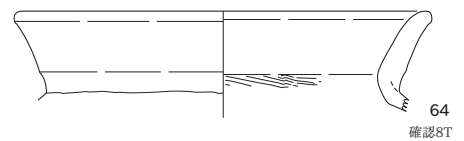
SD1

包含層・サブトレンチ

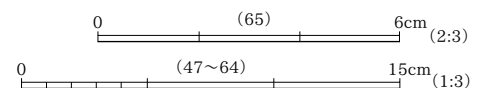
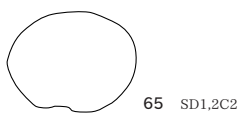
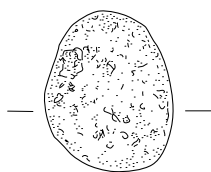




確認調査



石製品





下大口遺跡周辺空中写真

米軍撮影1948年



完掘状況（南西から）



下大口遺跡出土土器



調査前現況



表土掘削



基本層序1 (南東壁)



基本層序2 (北東壁)



SK6 完掘 (北西から)



SX2 完掘 (南から)

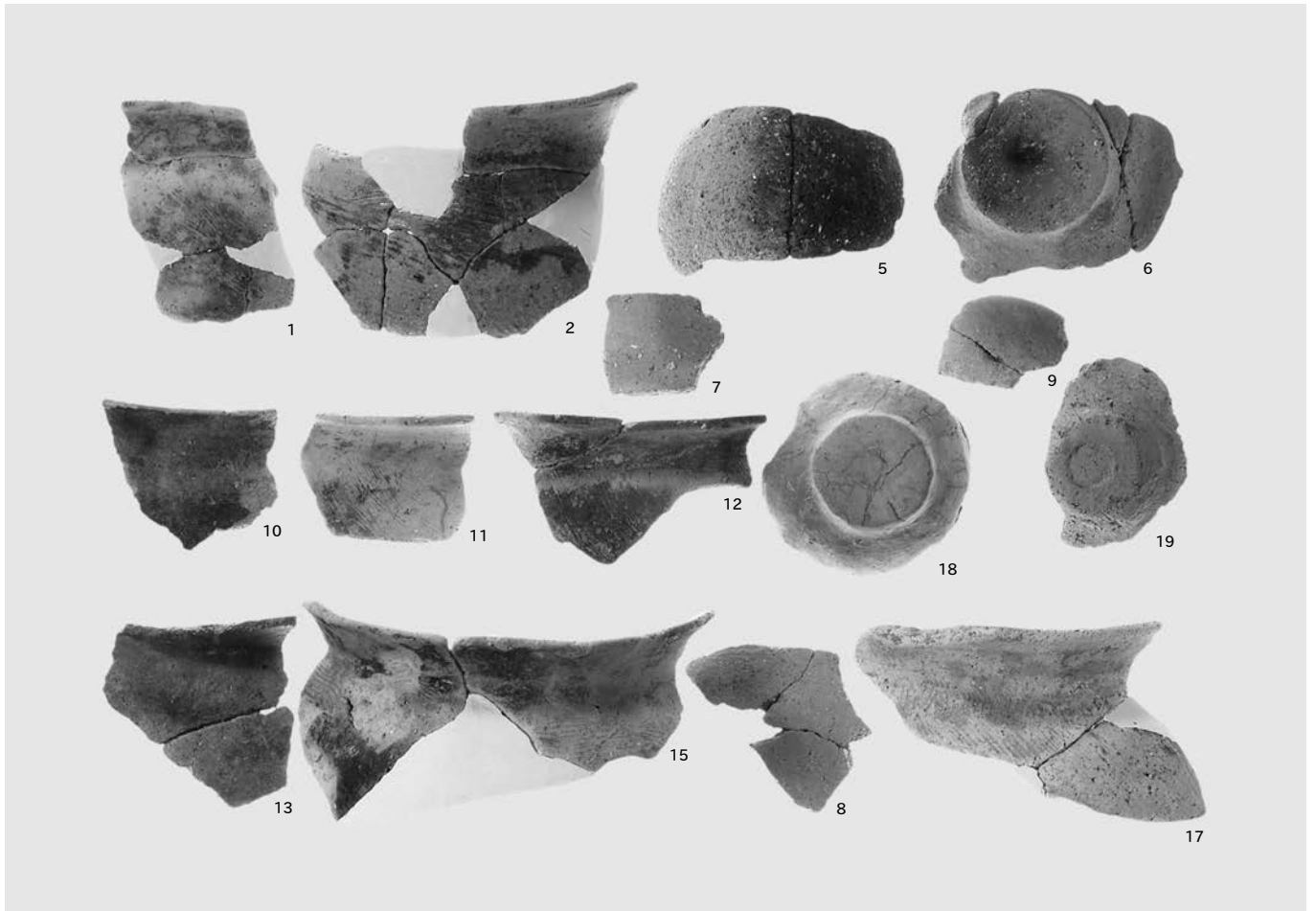


SX4 土層断面 (東から)

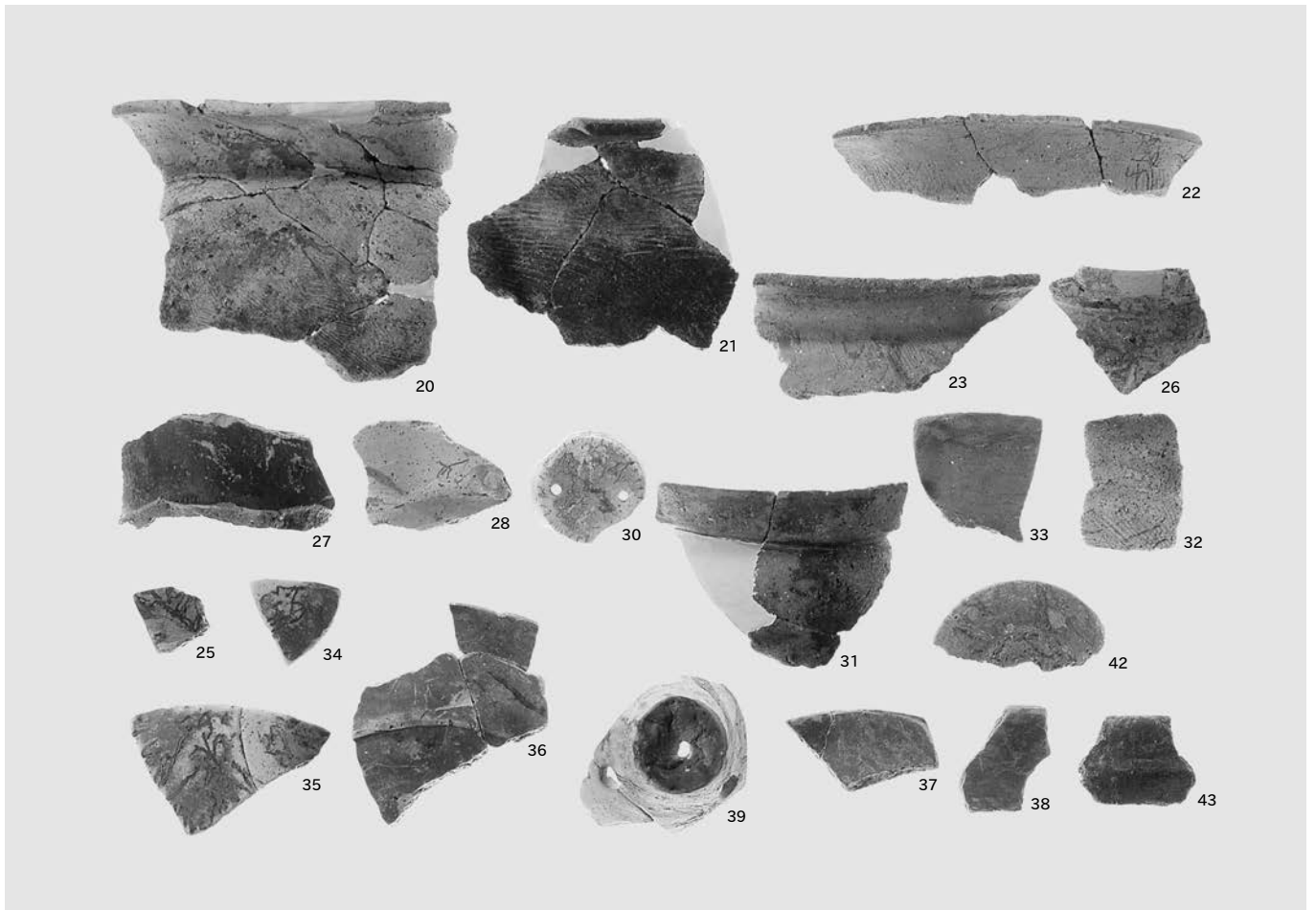


SX4 完掘 (南から)

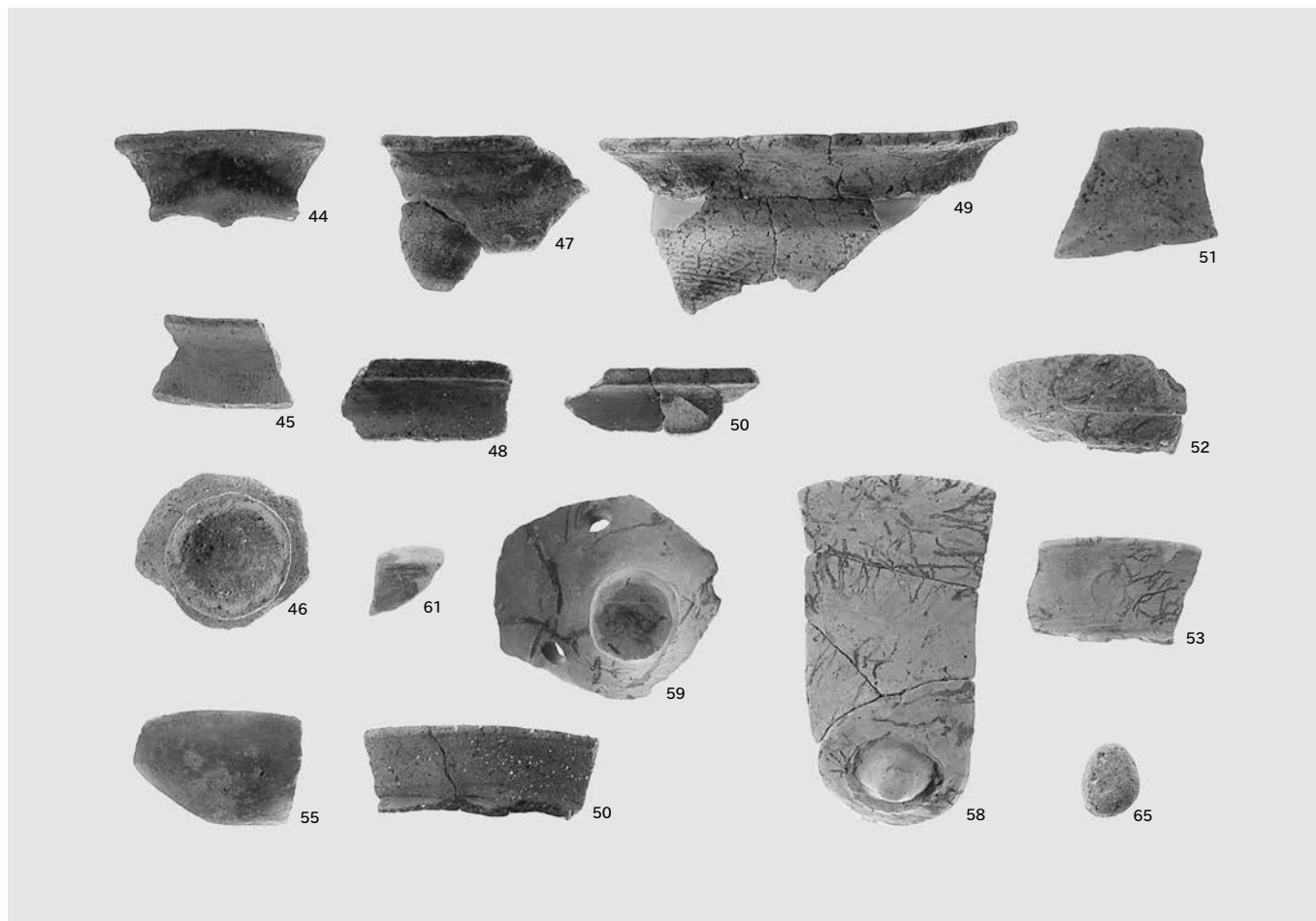




SK6(1・2)、SX2(5・6・7・8・9)、SX4(10・11・12・13・15・17・18・19)



SX4(20・21・22・23・25・26・27・28・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・42)、SD1(43)



サブトレンチ(44・45・46・47・48・49・52・53・55・58・59・61)、包含層(50・51)、SD1(65)



SX2(4)、SX4(29)、サブトレンチ(54)

報告書抄録

ふりがな	しもおおくちいせきだい2じちょうさ							
書名	下大口遺跡 第2次調査							
副書名	宅地造成に伴う下大口遺跡第2次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	今井さやか・早田 勉							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター							
所在地	〒950-3101 新潟県新潟市北区太郎代2554番地 TEL 025-255-2006							
発行年月	西暦 2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもおおくち 下大口遺跡	新潟県新潟市 北区葛塚字下大口 4668番地ほか	15207	733	37° 55' 32"	139° 13' 02"	20070611 ～ 20070625	119.05	宅地造成に伴う 本発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下大口遺跡	遺物包含地	古墳時代（4世紀）		土坑・溝・性格 不明遺構		土師器（甕・壺・蓋・ 鉢・高杯・器台）		
要約	<p>下大口遺跡は、標高約2.0mの旧大口川自然堤防に立地する。本発掘調査の結果、古墳時代（4世紀）の遺構・遺物が検出された。遺構には、土坑・性格不明遺構が検出された。土器は土師器甕・壺・鉢・高杯・器台が定量出土し、赤彩の壺や高杯・器台など装飾性の高い遺物も存在する。従来の編年案に照らすと4世紀（新潟シンボ編年6期）に属する。また、田などの遺構は検出されなかったものの、自然科学分析の結果、稲のプラントオパール及び炭化米が確認されたことから、稲作を行っていたと推察される。</p> <p>この結果を含め、今回の調査では東北・会津地方に進出する北陸系集団の一端を明らかにしたと評価される。</p>							

下大口遺跡 第2次調査

宅地造成に伴う下大口遺跡第2次発掘調査報告書

2008年 3月 28日印刷
2008年 3月 31日発行

編集・発行 新潟市教育委員会
新潟県新潟市中央区学校町通一番町602番地2
〒950-8550 TEL 025 (228) 1000
新潟市埋蔵文化財センター
新潟県新潟市北区太郎代2554番地
〒950-3101 TEL 025 (255) 2006

印刷・製本 北越印刷株式会社
新潟県長岡市福住1丁目6番27号
〒940-0034 TEL 0258 (33) 0306